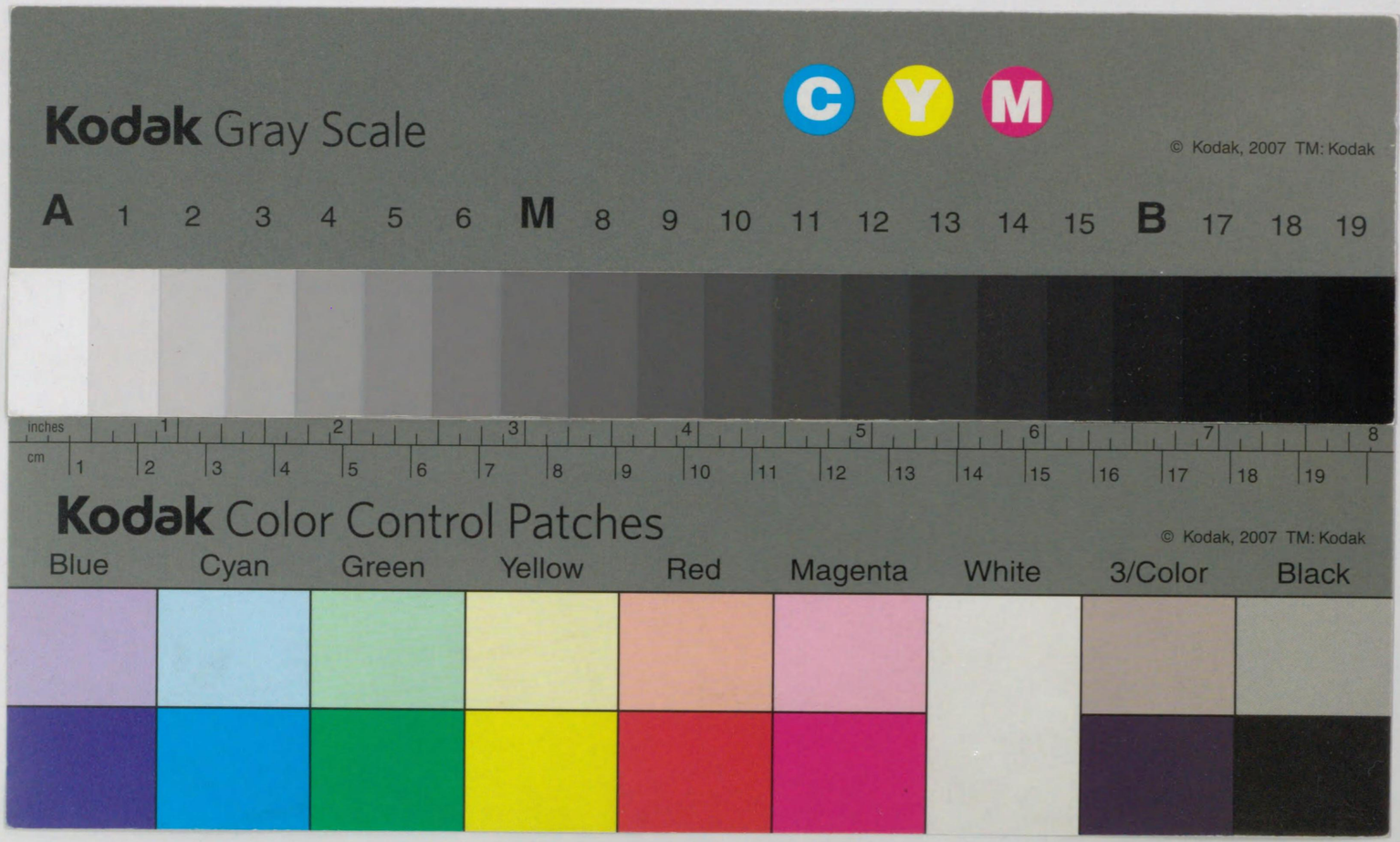

653-295
1200501570497

スタヴロギンの告白

神西清訳

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

65-3-

白告のンギロヴタス

献本
作品社

帝國圖書館藏

イキスフーエトスド

白告のンギロヴタス

譯清　西神

昭和九・六・五・内交・帝圖

643-295

はしがき

『チホンの僧房で』との原題をもつこの章は、もとより獨立の一篇を成すものではなく、『悪靈』第二部のうち『太子イヴァン』と『ステパン・トロフィモヴィチ家宅捜索に逢ふ』の兩章の間を占むべきものとして書かれた。一八七一年晩秋『ルスキイ・ヴェーストニク』誌上でこの小説の第二部が完結されようとした際にはその終章を、さらに翌年の晩秋再び同誌上に第三部が連載されはじめた際にはその首章を、それぞれ形作るべく豫定されながら、しかもこの二度の計畫がともに實現されず、この章が遂に姿を消してしまつたのは何も作者の意志ではなく、同誌の主幹カトコフの世俗的な勸告の結果であつた。ドストエーフスキイの昵懇者ストラーホフはトルストイ宛の手紙(一八八三年秋)のなかで、「…カトコフはスタヴロギンの一場面(*violatio, etc.*)を活字にすることを拒んだが、ドストエーフスキイは當地で澤山の人に讀んで聽かせた」などと言ひ、この作家が「嫌惡すべき行爲に強く牽引され、且つそれを誇りとするを常とした」ことの一つの例證に持出さうと試みるかに見えるが、この様な點には今深く立入らうと願はないまでも、作者がこの一章に感じてゐた愛着の强さだけは叙上の幾つかの事實からも明かに察知しうる。

恐らくドストエーフスキイは、この章を終章乃至首章に豫定することによつて、『悪靈』の進行に全く新たな衝撃を與へようとしたのでもあらう。この事はまた、チホンなる人物の突如とした出現によつても容易に察せられる。チホ

ンといふのはどういふ人物であるのか。思ふに彼は、スタヴロギンより高くも低くもない、對等にして而も屢々對等以上に深い何かの一存在であり、寔にスタヴロギンの様な男にとつては不倶戴天の怖るべき好敵手である。何故ならば彼我の交渉の鋭さは、互に方向を異にした二つの線の相交はる角の鋭さから生れるものではなく、明かに殆ど相重なるばかりにして拙く引かれた二つの平行線が、互に相押退け而も相牽きながら共通の極點に魁けしようと急ぐプロセスに演じられる譎詐、甘言、脅迫等々さまざまな手管の、相交錯する心理闘争の鋭さに根ざすものだからだ。流石のスタヴロギンもこの場面に於けるほど間斷ない不用意さのうちに——まるで吾とわが心理の搾木のもとにある様な一瞬も歇まぬ錯亂の繼起のうちに、數知れぬ虚妄の眞實を吐き散らさねばならぬ場合に逢遇したことは曾てなかつたに違ひない。（チホンに比べるとき他の幾人かの人物らはスタヴロギンにとつて、自らを利用される心配なしに自在に惡用しうる謂はば與し易い媒質にしかすぎぬ。——）かうしてこの僧房の一場面は、横光氏の言はれた象棋の譬へを拜借して言ふなら、實に王手飛車とりを三分ののちに豫想せしめずには措かぬ、すさまじい切迫感裡に終始してゐる。したがつて又この章の削除とそれに伴ふチホンの消失とが、第三部に強ひた偏差度の大きさは殆ど想像に餘るであらう。

現在傳はつてゐるこの章のテキストには次の二種が數へられる。

（A）一九二一年に「中央文書保存所」で發見された『ルスキイ・ヴェーストニク』誌の棒組校正刷十五本分。これは終の部分（十四、十五の間）に一本分を缺くが、他面また第一節の後三分の一、第二節全體、第三節の前約三分の二にわたつて夥しい書込みがある。それは屢々「創作」に近いほど根本的であり、中にはまだ覺書の域にとどまり原文との聯脈の判然せぬものもあるが、概してこれらの改訂を原文に施すことは可能であり、その結果は極めて新しい面貌をこの章に齎すことになる。

（B）前者と略々時を同じくして「プーシキンの家」で發見された夫人の手になる寫稿。これは最後の十三アブザッツを缺いてゐるのだが、間々（A）の書込みによる修正を受入れてゐるにも拘らず、全體としてはこれを無視して舊態を存してゐる點で、次の二樣の想像を許す。すなはち、この寫稿は改竄を否定した作者の意志に基くものであるか、それともこの寫稿は不充分な材料をもとにしてなされたものであるか。

で、この二つの想像のうち孰れに傾くかによつて、互に矛盾する上記（A）（B）の兩テキストからは無數の形を導き出しうる筈である。事實、私の知るだけでも非常に相異る二つの形が行はれ、それぞれ決定性を爭ふかに見える。第一の形は、一九二二年『ブィロエ』誌所揭の（B）の全文を殆どその儘に殘し、脫落の部分のみを（A）で補つたもので、當時イギリスやドイツに傳播したのはこの形であり、わが國に傳へられたのもこれである。第二の形は重點を能ふかぎり（A）に傾けたもので、「ドストエーフスキイ藝術作品全集」（一九二七年國營出版部版）に收めてあるのは卽ちこれであつて、從來わが國に紹介の機を得てゐない。

私のこの飜譯は右のうち第二の形によるものである。次に兩者の差違の概略を記す。すなはち、上記（A）に見出される加筆の範圍内での二三の重要な誤植の訂正、また從來の挿話のより緻密な仕上げ等のほか、幾つかの挿話の削除による簡潔化乃至新たな挿話の導入による複雜化として目立つのは——

（a）第二節「告白」の中で、頬打ちを受けた經驗を語る部分の削除。

（b）窃盜に關する挿話の削除。その代りにホテルのより詳しい描寫（ドブロリュボフ博士など——）の導入。

（c）マトリョーシャとの場面を急激に中途で斷切つて、その代りにチホンとの切迫した會話の挿入。

更に第三節になると、チホンとの會話のより深い發展、また掛引の尖鋭化に伴ふ段落の大膽な轉倒などのほか——

（d）折られた磔刑像に關する挿話の二箇所に及ぶ巧みな導入。

（e）「痴愚は罪ならず」の句で始まる長い一段落の導入。

スタヴロギンの告白

右は結局、ドストエーフスキイ自身が校正刷に加へた改竄の跡の若干を數へあげたにしか過ぎず、もし愼重にこの第一第二の兩形の細部を對比考量するなら、彼の文學的方法の進展した方向も指呼しうるであらうし、また晩年近い彼に於ける推敲の祕義にもより端的に接しうるかも知れない。とまれ先づ眼を射るのが、チホンとスタヴロギンの一この血緣の心理相互間の千變不可思議な交代、轉化、隆替の相のめまぐるしいまでの昂進、從つて殆ど息詰るほどの更に一段高い劇的效果の發生であることは異論のない所であらう。私がわざわざこの第二の形の移植を試みたのは右のやうな改竄の方向を美しいと見るからであり、あながち異本的興味からばかりでないことは改めて申すまでもない。

昭和九年春

譯者

一

その夜ニコライ・フセヴォロードヴィチ（スタヴロギン）は、一睡もせずに褥椅子（ディヴァン）に坐り通した。ぢつと動かぬその眸は屢々、簞笥の隅の一點に注がれてゐた。彼の部屋のランプは夜通し燃え續けた。朝の七時頃、椅子に掛けたまま眠に落ちた彼は、何時もの通り九時半かつきりに朝の珈琲を持つて這入つて來たアレクセイ・エゴーロヴィチの氣配に眼を覺ました。眼を開けたとき彼は、よくもこんな寢坊が出來たと吾ながら愛想が盡きたやうな、不機嫌な顏附だつた。すぐさま珈琲を飲みほし、着替をして、急いで家を出て行つた。よく氣の附くアレクセイ・エゴーロヴィチが、「別にお呼附もございませんので？」と聞いても、返事もしなかつた。地面を見詰めたまま、深い思に沈んで街路を歩いて行つたが、時々ひよいと首を上げるかと思ふと、忽ち何か知ら捕捉できぬ、激しい不安をあらはした。家を出てまだ幾らも來ないある四辻で、五十人以上もゐるかと見える農民の一隊が、彼の行手を横切つた。殆ど口も利かずに、堂々と故（わざ）とらしい隊伍を作つてゐた。仕方なく傍の小店の店先で一寸待つてゐると、「あれはシピグリン工場の勞働者だよ」と、誰やらの言ふ聲が耳にはいつた。彼は碌々その行列を見もしなかつた。やつと十時半ごろになつ

て彼は、町外れの河に臨んだ、われらのスパソ・エフィーミイ聖母修道院の門前にやつて來た。そこまで來ると、彼は何か心配事でも思ひ出したらしい樣子で立止つて、急いで脇ポケツトに手を突込んだが、やがてにやりと笑つた。境内に這入つた彼は、折よく來掛つた小坊主に向つて、この修院に籠つて居られるチホン僧正のお部屋は何處かと訊いた。すると小坊主はお辭儀を始め、直ぐ案内に立つた。長い二階建の本館が盡きるところにある昇段で、出會ひ頭に肥つた白髪の僧が、權柄高にいきなり彼を小坊主の手から奪ひ取つて、矢張り絶えずお辭儀をしながら（尤も肥つて居て低く屈むことが出來ないので、頻りに頭をこくんこくんさせるだけだつたが）細長い廊下を導いて行つた。そしてしよつ中、「どうぞこちらへ」と繰返した。ニコライ・フセヴォロードヴィチは、さう言はれなくても蹤いて行つた筈である。その僧はまた、何やかと物を尋ね、掌院樣の話を持掛けたりしたが、返事をして貰へないのを見ると益々恐れ入つた素振りを見せた。彼の記憶する限り、此處には子供の頃にしか來たことがなかつたのだが、どうやら自分の事が知れてゐるらしいのにスタヴロギンは氣が附いた。廊下の盡きる所にある扉まで來ると、その僧はいかにも自信あり氣な手附きで扉を開けて、駈け出して來た平僧に「這入つてもよいか」と慣々しく問掛けた。が、その答も待たずに扉を大きく開け放し、丁寧に身を屈めながら「貴い」客人を招じ入れて、禮の言葉を貰ふや否やまるで逃げる樣に姿を隱してしまつた。ニコライ・フセヴォロードヴィチはその小部屋に歩み入つた。すると丁度その時隣室の扉口に、五十ぐらゐの背の高い痩せた男が、質素な普段着の法衣姿で現れた。外見は何となく病身さうで、曖昧な薄笑ひを浮べ、恰も含羞んでゐる樣な妙な眼附をしてゐる。これがチホン其人であつた。ニコライ・フセヴォロードヴィチがこの僧正のことを始めて聞いたのはシャートフの口からだつたが、それ以來自分でもちよいちよい色んな噂を聞集めてゐたのである。

その噂は種々樣々で、互に矛盾したものだつたが、何か共通なものがあるとすれば、それはチホンの好きな連中も嫌ひな連中も（さう云ふ人達もゐたが）、一樣に何か沈默を守るといつた風を見せたことである。嫌ひな連中は多分蔑みからだらうし、崇拜者乃至は狂信者になると、それとは反對に一種の內氣さからしい。つまり何かしら彼の弱點——恐らくその氣狂ひ染みた所を、隱さうとするのであらう。ニコライ・フセヴォロードヴィチは、彼がもう六年もこの修道院に起居して、平民の間にも高貴の人々の間にも相當の信仰者がゐるのを知つてゐた。それのみか遠いペテルブルクにさへ、熱心な崇拜者、とりわけ女性の崇拜者のあるのを知つてゐた。さうかと思ふと、所謂「クラブの長老」として通つてゐる或る信心家の口から、こんな評判も聞いてゐた、「あのチホンはまあ狂人さ。それに大酒を飲むに違ひない。」ここで私は一寸お先廻りをして、この最後の言葉が全く根も葉もない作り事で、その實は脚部の慢性のレウマチと、時々起る一種の神經性痙攣に過ぎないことを附加へて置かう。ニコライ・フセヴォロードヴィチはまた、修院籠りのこの僧正が、生れつきの弱氣のためか、それとも「位の高さにも似ぬ恕すべからざる放心癖のため」か、兎角その修道院の內部でも、餘り受けのよくないことを知つてゐた。修道の掟のことでは苛酷なほど嚴格であるのみならず、また學問の上でも有名な掌院樣が、彼に對しては一種の敵意を抱いてゐて、その懈怠な生活振りを（勿論面と向つてではなく蔭でではあつたが）咎め、時には邪教視までしてゐるとの噂もあつた。修道院の敎友達も、假令この病身の聖職者をひどく疎略に扱はぬまでも、謂はば慣々しい扱ひをしてゐた。チホンの庵室をなしてゐる二つの部屋も矢張り、何となく奇妙な風に飾り附けられてゐた。見るからにこちこちの、皮の擦り切れた古めかしい家具類と並んで、三つ四つ美術品めいたものもあつた。贅を凝した安樂椅子、細工の細かい大きな書卓、精巧な彫刻入の書棚、それに幾つかの小卓、飾棚など、みな信者の寄進といふことは一目で肯ける。高價なブカラ織の掛けてある傍には、色んな花莚もある。「俗界」や神話時代に取材した版畫があるかと思へば、隅の方には大きな龕が据つて、樣々の聖像を金銀にきらめかせてゐる。その中の一つは餘程古いものと見え、聖骨がはいつてゐる。彼の藏書も、噂によれば餘り雜多に失し、非常に矛盾してゐるさうである。偉い聖人やキリスト敎の恩人たちの著書がある一方には、戲曲や小說もあり、その他「何があるか知れたものではない。」

最初の挨拶は何故だかお互にひどくぱつが悪さうに、急いで殆ど粗略な調子で交されたが、それが済むとチホンは客を奥の間に招じ入れて、矢張り急き込んだ調子で、卓に向つた褥椅子に掛けさせ、自分は傍の編細工の肘椅子に座を占めた。いざ坐ると、意外な事には、ニコライ・フセヴォロードヴィチはまるで氣を失つた風になつてしまつた。何か異常な、而も爭ふべからざる事物に全力を擧げてぶつかつて行つたやうな、同時に殆ど不可能事に直面した様な具合になつてしまつた。眼を上げてちらつと部屋の中を見廻したが、その眼は明かに何も見はしなかつた。何か考へ込むらしい様子をしたが、それも何が何やら分らず仕舞だつたに相違ない。靜寂が、彼を吾に歸らせた。遽かに彼はチホンがまるで羞を含むもののやうに要りもせぬ微笑さへ漂はせて、伏眼を作つてゐると感じた。瞬間、彼は嫌惡と心の亂れとで居たたまれぬ思ひがして、そのまま座を立つて出て行かうとした。確かにチホンは醉つてゐるのだと思つたからである。だがその時、不意に眼を上げた相手が、思ひ掛けない謎のやうな表情を浮べて、ぢつと唯ならぬ深い思惟の籠つた眸で彼を見詰めた。その表情と凝視に逢つて、彼は危く身顫ひせんばかりだつた。そして忽ち、場面は全く逆のものに思へて來た。つまり、チホンは何故彼が訪れたのかを知つてゐるのだ。世界中に誰一人その譯を知り得る者はあるまいが、兎に角彼の訪問を豫知してゐたのだ。そのチホンの方から最初に口を切らないのは、彼を憫れみ、彼にみじめな思ひをさせまい爲の心遣ひなのだ。

「貴方は私を知つてお出でなのですか」とぶつきら棒な調子で、いきなり彼は尋ねた、「這入つて參つたとき、名前を申上げたでせうか。お許し下さい、こんなうつかり者なので……」

「お名前は伺ひませんでした。が幸ひ、四年ほど前に一ぺん、この修道院でお目に掛つたことがあります。……ほんの偶然。」

チホンの口調はひどく緩かで坦らだつた。物柔かな聲で、一語一語をはつきりと響かせた。

「四年前にこの修道院になんか來たことはありません」とニコライ・フセヴォロードヴィチは、要りもせぬ疎略な口調で言ひ返した、「子供の頃に來たことがあるだけです。勿論貴方のまだ被入らない頃のことです。」

「お忘れかも知れませんね」と氣を遣ひながら、強ひて言張る様子もなくチホンが言つた。

「いや、忘れなぞしません。それに第一、忘れるなんて滑稽極まる」——何となく調子外れな執拗さで、スタヴロギンの方は言ひ張つた、「貴方はもしや、私のことを噂にでも聞かれて、何かの概念を作り上げられたのではないでせうか。そのため、御自分で私を見たことがある様な思ひ違ひを。……」

チホンは默つてしまつた。そのときニコライ・フセヴォロードヴィチは、彼の顔を時々神經質な痙攣が掠め過ぎるのを認めた。慢性の神經衰弱の徴候である。

「お見受けする所、お身體の具合がお悪い様ですが」と彼は言つた、「お暇した方がよい様で。」

さう言ひながら、彼は本當に腰をもたげた。

「さう。實は今日も昨日も、脚がひどく痛んでなりません。昨夜は殆ど眠れませんでした。……」

チホンは口をつぐんだ。客は客で、妙に考へ込んでしまつた。二分間ばかりの長い沈默が來た。

「私をぢろぢろと御觀察ですね」と不意に彼は、猜疑深い顫へ聲を上げた。

「貴方を見てゐて、母御のお顏を思ひ出しました。容貌は似て居られぬが内心には、精神的に色々と似て居られる所があるやうです。」

「いや少しも似てゐません。殊に精神的になんか。斷然、毛ほどの似寄りもありません」——再たしても、要らぬ昂奮を見せて、何故かうも一々反對したいのか自分乍ら分らずに、ニコライ・フセヴォロードヴィチは妙に言ひ張つた、「貴方がそんな事を仰言るのは……私共の境遇を憫れだと見て居られる證據です」——と思はず口走つて、「すると、母はちよいちよい此方へ伺ふのですか。」

「見えます。」

「そりや知らなかつた。母は一言も言ひませんでした。度々參るのでせうか。」
「月に一度位……時にはもつと。」
「本當に、一度だつて聞かなかつた。聞きませんでした。（この事實はひどく彼の胸に應へたらしかつた。）——ぢや母は貴方に、私が氣が狂つてゐることを申上げたでせうね」と再た、彼は口走つた。
「いや亂心のお話などは伺ひません。尤もそのことに就いては、他の人から聞いてゐますが。」
「そんな瑣らぬことを一々憶えて居られるとは、貴方も仲々物覺えがよく被入る。毆打事件もお聞及びでせうな。」
「何かと伺つてゐます。」
「それぢや、詰りみんなだ。よくもそんなに耳を明けて置く時間がおありだ。決鬪のことは？」
「決鬪のことも。」
「そこで新聞は要らなくなる。シャートフが何か私の事を言ひましたか。」
「いや。尤もシャートフ氏は存じ上げてはゐますが、もう久しくお眼に掛りません。」
「ふむ。ところで、あの地圖は何のですか。おや、今度の戰爭のではありませんか。何だつてあんな物がお入用なんです。」
「本文と照合せるのでね。實に興味津々たる記事です。」
「拜見。さう、筆法は萬更でもない。でも、まさか貴方がこんな物をお讀みだとは思ひませんでした。」
彼は本を引寄せて、ざつと一瞥した。それは今度の戰爭の戰況に關する浩瀚な一卷だつたが、その才走つた筆致は軍事的と言ふよりは、寧ろ純文學的な意味で成功を見せてゐた。暫く頁を引繰返してゐた彼は、苛立たしくその本を拋り出した。
「一體何だつて、ここに來たのか、さつぱり分らない」と氣難しげな聲で言つた。返事の言葉を待ちでもするやうに、眞面にチホンの眼に見入りながら。
「貴方もどうやら、お身體の具合がお惡いやうですね。」
「ええ、多分。」
そして突然彼は、他の人ならとても分りつこのない程の、非常に短い斷れ斷れの言葉でだつたが、彼が一種の幻覺に、殊に夜間は毎夜のやうに襲はれること、時々自分の傍に何かしら惡意のある嘲笑的な者の存在を現に見たり、意識したりすることがあると語つた。しかもそれは、「とても利口な奴」で、「時によつて色んな風に面相を變へる上、やたらに性格も變りますが、何時も同じ奴には違ひないのです。で私は、しよつちう苛々してゐるのです。……」
その話振りは、實際狂人の口からでも出さうな後先の順序も立たぬ、粗野で錯雜したものだつた。とは云へニコライ・フセヴォロードヴィチは、今まで嘗て見せたことのない不思議な率直さで語つた。それは全く彼に似合しからぬ明け放しな態度で、遽かに彼の裡から今までの人格が消失せた樣にさへ見えた。幻覺を語る聲が恐怖におびえて露は顫へるのも、少しも羞しがらなかつた。しかしそれは皆、現はれたときと同じく急に消え失せて行つた。
「なに、みんな下らん事ですよ」と吾に歸つた彼は極りの惡さうな早口で、忌々しげに呟いた、「醫者に診て貰はなければ。」
「それが一番です」と、チホンは斷言口調で言つた。
「貴方は妙に肯定的な物の言方をされますね。……貴方は、私のやうな幻覺を見る男に逢つたことがおありですか。」
「あります。極くたまにですが。さう云ふ人達の中で、今でも憶えてゐるのは一人だけですが、それは士官で、何物にも換へ難い最愛の夫人を亡くされた後で、そんな風にならられたのでした。もう一人の方は人傳に聞いたのです。二人とも、その後外國へ行つて療治をしましたよ。……貴方はもう大分前から、そんな風でしたか。」
「一年位です。ですが、これはみんな下らん事です。醫者に診て貰ひませう。本當に下らない、怖しく下らないこと

なんです。つまり私自身が色々な形を取るだけの事なのです。今こんな——こんな氣取つたことを、取つて着けた様に申したので、定めし貴方は私が内心では相變らず半信半疑で、それが私自身であつて、決して悪鬼なのぢやないとは、未だに信じ切れずにゐるのだとお思ひでせうね。」

チホンは問ひたげな様子を見せた。

「それで、——貴方は本當にそんな物を御覽なのですね、」と彼は訊いた。すなはち、それが確かに安念であり、病的な幻覺であると云ふ風な疑念を振拂ひながら。「本當に、何かの像を見られるのですね。」

「見るから見えると、先程も申上げたのに、またそんな事を蒸返されるとは實に心外です」スタヴロギンは又も、一語毎に昂奮しはじめた、「勿論見えます。見えますとも。そこの貴方のやうにね…時には見えても、見える物を信じきれずにゐます、でも矢張り見えるのです…時には、私と彼奴の、どつちが本物なのか判らなくなります…そりや、こんな事はみんな下らぬことです。所で貴方は一體、これが本物の悪鬼だとはどうしても考へられないのですか」——彼は笑ひ出して、遽かに嘲笑的な態度に豹變しながら附加へた——「こんな事に掛けては、商賣柄貴方の方が巧い筈ですね。」

「まあ、病氣と申した方がいいのでせう。尤も…」

「その尤もと仰言るのは何です。」

「悪鬼の存在することは確かです。ただ人に依つて解釋が非常に區々なのだけです。」

「貴方は再た眼を伏せなさる」とスタヴロギンは、氣短かに嘲笑を響かせた、「私がゐるので、羞しくおなりですか。私が悪鬼を信じ乍ら、信じない様な振りをして、『本當にゐるのだらうか、居ないのだらうか』と意地悪な質問をするからですか。」

チホンは曖昧な微笑を漏した。

「御承知の様に、私は含羞む柄でもないし、少々の無禮は眞平御免を蒙る事として、赤裸々に本心を貴方に申しませう。——私は悪鬼を信じます。立派に正式に承認します。それもアレゴリイでは無しに、ぴんぴん生きてゐる奴をね。また、誰かの腹を探つて白狀させようなんてさもしい根性でもありません。これだけ申せばいいでせう。」

彼は神經質に、不自然な笑方をした。チホンは好奇の眼でぢつと彼を見てゐた。その眸は柔しかつたけれど、何處となく臆病な所があつた。

「神様をお信じですか」と、急にニコライ・フセヴォロードヴィチが口走つた。

「信じます。」

「もし信仰あらばこの山に『此處より彼處に移れ』と言ふとも移らん、と言ふ文句がありましたね。…こんな下らん事を申して御免なさい。だが矢張り私は、伺ひたいのです。貴方には山が移せますか、それとも移せませんか。」

「神が命じ給ふなら移せませう」と、チホンは再た伏眼になりながら謙抑な口調で靜かに言つた。

「それぢや神が自分でやるも同じです。さうぢやない、貴方がです、信仰の報いとして、貴方がです。」

「或ひは、移せないでせう。」

「『或ひは』ですか。成程それも悪くないな。ふ、ふ。で矢張り、疑つて居られるのですね。」

「信仰の足らぬ故に、疑ひもします。」

「何ですつて。貴方も矢張り信仰が足りないのですか。それぢやこの山に『此處より彼處に移れ』と言ふとも移らん、と言ふ文句がありましたね。…こんな下らん事を申して御免なさい。だが矢張り私は、伺ひたいのです。貴方には山が移せますか、それとも移せませんか。」

——さう言つて彼は、一種の驚嘆の面持で、相手をぢろりと一瞥した、けれどその驚嘆は彼の本心から率直に流れ出たものであつて、今までの質問の嘲笑的な調子に全くそぐはなかつた。

「左樣。——或ひは、信仰の仕方が足りないのかも知れません。」

「でも矢張り、假令神の助力に依るにせよ山が移せると信じて被入る。それだけでも大した事です。少くとも信仰を

願つて居られる。山の話も文字通りに解して居られる。兎に角並大抵なことではありません。私は兼々から、わが國の利未達の急進派がルッテル主義に傾いて、奇蹟を自然現象で説明しようと掛る傾向があるのを見てゐました。かうなつて來ると、舊態依然たるなけなしの大僧正ぐらゐぢや、何と申しても衆寡敵せずですね。いくら劍の威力を楯に取らうとも。……貴方は勿論、キリスト教徒ででもいらつしやるのでせうね？」スタヴロギンは早口に話した。その言葉は眞面目に響くかと思ふと、忽ち嘲笑に歪んだ。何の目的でこんな會話をしてゐたのか——訊ねたり、一人で昂奮したり、好奇心を働かせたりするのか、自分にも分らないらしかつた。

「主よ、はたわれ爾の十字架に羞づることなし」とチホンは呟いた。その聲に熱情の嚊が籠り、頭は益々低く垂れた。

「だが、神を信ずることなしに、惡鬼を信じることが出來ませうか？」——さう言つてスタヴロギンは笑顏になつた。

「それは大いにあり得ることです。いや、よくある事です」——チホンは眼を上げて、微笑した。

「そして私は、貴方がそんな信仰にしろ、全くの無信仰よりは兎も角も增しだとお考へだらうと、確信致すのですが……」スタヴロギンは笑聲を立てた。

「それ所か、完全な無神論は、俗人の無關心よりは尊敬に値しますとも」と、如何にも虛心な調子で、寧ろ愉快氣にチホンは言つたが、同時に用心深い不安な眸を、客に注ぐことを忘れなかつた。

「ああ、それが貴方だつたのですね。貴方は本當に驚くべき方だ。」

「それを完全な無神論者と呼ばうと呼ぶまいと、孰れは最も完全な信仰の究極の段階の一步手前に立つてゐるには違ひないのです。その一步を超えるか超えぬかが問題です。所が、無關心な人は惡い畏怖の他には何の信仰も持たないのです。よほど感性の强い人にさへその畏怖は、時偶に起るに過ぎないのです。」

「成程。……貴方は默示錄をお讀みになりましたか。」

「讀みました。」

「では憶えておいでですね——ラオデキヤに在る敎會の使に書きおくれ……」

「憶えてゐます。」

「聖書は何處です」——スダヴロギンは卓上を眼探りながら、妙に急き込んだ調子で吃つた、「貴君に讀んで差上げたいのです。……露譯のがありませうか。」

「あの條は空でも言へます」と、チホンが言つた。

「暗記して居られるのですね。では誦んで下さい。……」

彼は急いで眼を伏せ、兩の掌を膝に、もどかしげな樣子で聖句を聽く用意をした。チホンは一語一語思ひ浮べながら誦んだ。——

「ラオデキヤに在る敎會の使に書きおくれ。『アァメンたる者、忠實なる誠なる證人、神の造り給ふものの本源たる者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、なんぢは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願ふ。かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微溫きが故に、我なんぢを我が口より吐出さん。なんぢ、我は富めり、豐なり、乏しき所なしと言ひて、己が惱める者・憐むべき者・貧しき者・盲目なる者・裸なる者たるを知らざれば、……』」

「もう結構です」——スタヴロギンは遮つた、「私は、貴方が大變に好きになりましたよ。」

「私も同じです」と、チホンは低く答へた。

スタヴロギンは不圖口を噤んで、急に再た先刻の沈思に落ちて行つた。それは何か間歇性の發作に似たもので、これで既に三度目だつた。チホンに向つて「好きになつた」と言つたのも、矢張り發作的に口を衝いたに過ぎなかつた。少くも、彼自身にとつては思ひ掛けぬ言葉であつた。一分間以上も、そのままで過ぎた。

「憤つてはいけませんよ」——チホンが囁いた。まるで彼自身が怯えでもしたやうに、客の肘の所を指で觸れながら。

相手はびくりとした。そして痼癖がその眉に皺を疊んだ。
「どうして、私が憤り掛けてゐるのがお分りです」と、彼は早口に云つた。チホンが何か言はうとすると、相手は急に、言ひ解きがたい錯亂の言葉で遮つた。
「何故、私が憤るに相違ないと見抜かれたのです。如何にも仰言る通り、私は腹が立ちました。それは、『好きになつた』と貴方に申したからです。成程、貴方の仰言る通りだ。しかし貴方は、無禮なシニックでいらつしやる。貴方は人性に就いて、何か輕蔑的な考へでいらつしやる。私ではなく、ひよつと他の人間だつたら、こんな忿怒は感じないで濟んだでせう。……だが問題は人のことではない、私のことなのだ。何と云つても貴方は變り者です、氣違ひですよ。……」
彼はますます息り立つて行き、不思議なほど無遠慮な言葉を吐き散した。——
「さう、私は間諜だの心理家だのは大嫌ひです。私は誰も心の扉に近づけようとは思はない。誰一人の助力も要りはしない。自分で立派に切抜けて見せます。ひよつとしたら貴方は、私が貴方を怖がつてゐるとお考へかも知れないが——」彼は急に聲高になつて、挑むやうに顏を上げた、「ひよつとしたら貴方は、私が何か『怖るべき』祕密を打明けにやつて來たのだと思ひ込まれて、坊主に持前の好奇心をうづうづさせて居られるかも知れない。所がお生憎さまだ。私はこれんばかりの祕密だつて、貴方に打明けなどするものですか。貴方の助力なんぞ無しに、立派に切抜けられますからね。……いや、元々祕密なんかありはしない。……貴方が勝手にさう思はれるだけだ。」
チホンはきつとなつて、彼を見据ゑた。
「主の御使が、ただ微溫きよりも、冷かならんを願ふと言はれたのが、餘程貴方の心に應へたのですね」と、彼は言つた、「貴方は元來、ただ微溫くあらうとは思つて居られないのだ。貴方が何か異常な、恐らくは悽慘なたくらみに抑伏せられやうとして居られるのが私にはありありと感じられました。お願ひです。自分をさう苦しめるのは止して、すつかり話しておしまひなさい。」
「私が何か用があつて來たことは、始めからお分りでしたらうね。」
「さう。……先づ察してゐました」チホンは眼を伏せて、嚊くやうに言つた。
ニコライ・フセヴォロードヴィチは稍々蒼ざめて、手の先が纖かに顫へてゐた。數秒のあひだ、彼は身動きもせず默り込んで、最後の決心を極めるかの樣に、ぢつと眸を上げてゐた。到頭仕舞ひに、上衣の脇ポケツトから何やら印刷してある數葉の紙片を取出して、卓子の上に置いた。
「これは、流布を目的とした書類です」と彼は、妙にきれぎれな聲で言つた。「一人でもこれを讀んだ上は、私はもう隱さずに、皆に讀んで貰ひます。さう決めました。私は何も貴方に、詰り……貴方の助力など要らないのです。もうすつかり決心したのですからね。だが、どうぞお讀み下さい。……お讀みになりながら、何も仰言らないで下さい。讀み了られた後で、すつかり伺ひませう……」
「讀んでもいいのですか」——決し兼ねる樣に、チホンが訊いた。
「お讀み下さい。私は平氣です。」
「いや。これは眼鏡が無くちや讀めない。小さな字が一杯詰つてゐる。外國で刷つたものですね。」
「さあ、眼鏡」——スタヴロギンは卓から眼鏡を取つてやつて、褥椅子の背にどつかと凭れた。その彼を見やりもせずに、チホンは讀み耽つた。

二

事實それは外國で印刷したもので、ぎつしり活字のつまつた普通の小型書簡紙が三枚、假綴になつてゐた。確かに何處か外國のロシヤ人活版所でこつそり印刷に附せられたものらしく、一目見て非常に宣傳文書に似通つてゐた。表題は『スタヴロギンより』としてあつた。

それを其儘、この年代記に載せて置かうと思ふ。尤も幾らかの綴字上の誤謬だけは直して置くことにする。それはかなりの數に上つてゐて、その著者が兎も角も敎育ある人間であり、且つ博讀の人（勿論相對的な話だが――）であることを知つてゐる私には、少々意外な程だつた。語法は間違つてゐても直さずに置く。とまれ、この著者が何よりも先づ文學者でないことだけは明瞭だ。

なほ、お先廻りの嫌ひはあるが、ここで注意書を附けて置きたい。

私の見る所では、この文書は病的な思惟に關してゐる。この紳士に取憑いてゐる惡鬼に關してゐる。人が激しい痛に堪へ兼ねて、一瞬間でも苦痛の休まる姿勢を見出さうと、寢床の中で轉げ廻るのに似てゐる。いや、苦痛は休まらなくてもいい、何か他の苦痛が、たとひ一瞬間でも今の苦痛に代つて呉れさへすれば、と云ふ風な。……從つて、述べてある事が美しいとか智の輝があるとかなどは、勿論問題ではない。この文書の根本思想は、些かの衒氣もない怖るべき、罰を願ふ心である。十字架を、全國民の所罰を希ふ心である。且つこの十字架を擔はうとする希願たるや、十字架を信ぜぬ男にやつて來たのであり、しかも（何時だつたかのステパン・トロフィモヴィチの言草ではないが――）「今ぢや、それしか考へられぬ」のだ。

一方この文書は、何か知ら穩かならぬ、射倖的なるものに滿ちてゐる。とは云へあたかも、他の目的で書かれたものと見えるが。著者は、書かざるを「得なかつた」と言ひ、又「それを餘儀なくされた」と稱してゐるが、これは頗るありうる。この苦杯を飮まずに濟むなら、それに越したことは無かつたらうから。尤も、それを避け得なかつたことは事實であつて、彼は新たな烈しさに赴く好機を、偶々捉へたに過ぎないのだ。如何にも病人は寢床の中を縛げ廻つて、今の苦痛を別の苦痛に代へようとする。今の彼にとつて、社會との爭鬪が一番樂な狀態に思はれたので、さてこそ戰を挑んだのだ。

實際、この種の文書の裡には、社會に對する新しい、思ひも掛けぬ、不遜な挑戰が豫感されるものである。先づ何はともあれ、敵が現はれ出て呉れさへしたら、といふ風な。……

だが恐らく、これらの總て――卽ち公表の運命を擔つたこれらの紙片が、またしても縣知事閣下の耳の災難の一態に他ならぬ事を、誰が知つてゐようか。今、散々色んなことを喋つた擧句に、何故こんなことが頭に浮んだのか、自分ながら分らない。私は一々證據を擧げるのはやめて置く。そして、この文書が僞文書であり、卽ち全然架空の假作であるなどとは、少しも斷言しないつもりである。何よりも確かなことは、眞實は何處か中ほどに捜さねばならぬと云ふことであらう。……所で、大層お先走りをしてしまつた。その文書に戻つた方がいい。チホンが讀んだのは、次の通りである。――

スタヴロギンより。

私――退役士官ニコライ・スタヴロギンは、一八六×年ペテルブルグに住んで、放蕩に身を持崩したが、心は慰まなかつた。當時私は、或る期間に亙つて三つの宿所を持つてゐた。その中の一つは、食事及び召使つきで、ホテル住ひをしたのであるが、現在私の正式の妻であるマリヤ・レビャトキナも、偶々その宿に居たのである。他の二つの宿所は、情事のため月契約で借りたものに係る。その一つに私は情婦であつた或る夫人を迎へ、他の一つにはその小間使を迎へた。そして一時は、どうしたならその奥さんと少女とを私の部屋で落合はすことが出來ようかと、熱心に思ひ廻らしたものである。二人の性格を知つてゐた私は、この愚かな戯れに或る滿足を期待出來たのである。

そろそろと彼等を出會ふべく仕向けるため、私はこの二つの宿の中の一つ、――卽ちゴローホヴァヤ街の大きな家にある方のに、より繁々と通はねばならなかつた。と云ふのは、この宿に來るのが、その小間使の方だつたからである。その宿は四階にあつて、一間しかなく、ロシヤ人の或る町人夫婦から借りたものである。その夫婦の部屋は、私のに隣つたもつと手狹な一室で、且つ扉がぐらぐらなため何時も開け放しになつてゐて、寔に願つたり叶つたりであつた。だらしなく裾を引摺つて頬鬚を生やした亭主は、何かの事務所に勤めて、朝から晩まで留守だつた。女房は四十婆さんで、何やら裁物やら古着の縫直しをやつてゐたが、出來上つたのを持つて賣りに出るのであらう、矢張り留守勝ちであつた。で結局居殘るのは、その夫婦の一人娘と私とだけだつた。この娘といふのは、見た所ほんの赤ん坊で、名をマトリョーシャと云つた。母親はこの子を可愛がつてはゐたが、遠慮なしにお尻を打ち、彼等の習慣に從つて、何かにつけて娘を口汚く罵つた。この娘はまた私の世話を燒いて呉れ、衝立の蔭の掃除をする役目になつてゐた。私はこの家の番地は忘れたが、案内書に依ると今では古い家が取拂はれて、昔二三軒あつた跡には新しい非常に大きな建物が立つてゐるさうである。その町人夫婦の名前も忘れてしまつた。ひよつとしたら、始めから知らず仕舞なのかも知れない。何でもその女房の方は、ステパニィダヤとか呼ばれてゐた。男の方は忘れた。今どうして居るか、全然知らない。本氣に捜索を開始して、ペテルブルグ警察に然るべく問合せたなら、その消息を得ることは出來よう。部屋は中庭に面した隅の方にあつた。これは六月の出來事である。家の色は淡青色である。

或る日、私の机の上からペンナイフが消えて失くなつた。それはもう不用なもので、久しく投げやりにしてあつたのである。まさかお主婦が娘を打たうなどとは思はなかつたので、私は何氣なしにそれを話した。所がお主婦はつい今しがた、何かの繃縷が失くなつたのを娘が人形に着せようと盜んだのだらうと云つてがなり立てて、娘の髪を引掻き搖つたばかりの所だつた。その繃縷布がテェブル掛の下から出てきたときにも、娘は無實の罪に對して不平一つ言ふでもなく、默つて見詰めてゐた。それが、故意と默つてゐようとしてゐるのだと、私は氣附いた。これを此處に思ひ出すのは、娘の顏をしげしげと眺めたのはその時が初めてで、それ迄は碌々見もせずにゐたのだから。ひどく眉毛の薄い、雀斑だらけの子で、顏立は何の取柄もないが、ただ多分の子供らしさと靜かさ、非常な靜かさが見えてゐた。娘が何も口答へをしないのが、母親の癪に障つてゐた矢先へ、折好く降つて涌いたのが私のナイフである。今叩いたのは自分の方が惡かつたのが尙更その忿怒に油を注いで、いきなり傍の叩きの條枝を何本かもぎ取ると、娘がもう十二にもなるのも構はず私の眼の前で、痣になるまで打つた。それ程打たれてもマトリョーシャが大聲を立てないのは勿論私が其場にゐたためだが、一打ち毎に不思議な咽び泣きを漏して、あとでは一時間近くもひどく咽び泣いた。やつとお仕置が濟んだとき、不圖私は寢床の毛布の間にそのナイフを見附けて、默つてチョッキのポケットに入れた。そして表に出て、誰にも見附からぬ樣にずつと遠方の街に棄てて來た。ああ卑劣な眞似をした、とは直ぐに感じたけれど、それと共に心中何かしら慰むものがあつた。と云ふのは、いきなり私は燒火箸のやうな或る感情に全身が燒け透るのを覺え、それに夢中になり出したからである。此處で申加へて置くが、私が色んな汚らはしい感情の俘になるのは度々のことで、その擧句には沒理性にまで、――いや寧ろ異常な執拗さにまで墮ち込むのだつたが、と云つて決

して自分を忘れたことはなかつた。それが炎のやうに燃え立つときでも、私は同時にその炎を全く抑壓することが出來るのみか、その最高點に於て踏み留まることも出來た。ただ、踏み留まらうとは滅多にしなかつた迄である。更に申して置くが、私は何も環境だの疾病だのにかこつけて、自分の犯罪の責任逃れをする者ではない。

それから私は二日待つた。泣いてからと云ふもの、少女はますます沈默がちになつた。別に私に對して惡意を抱く樣子もなかつたことははつきり言切れるが、それにせよ、私の面前であんな風なお仕置を受けたことに、何か羞恥めいた感情を持つてゐたには相違ない。が、もともと溫順しい子供だつたから、その羞しさまでも一圖に自分が惡いからだと思ひ込んでゐたのである。私が態々このことを言ふのは、それが此の物語のなかで大層重要な意味を有するからだ。……その後私は、本宅であつたホテルに歸つて、三日を過した。食物のひどい惡臭がぷんぷんしてゐるホテルの部屋部屋には、大勢の人が巢喰つてゐた。どれもこれも、首になつた官吏とか、腰辨とか、往診の醫師とか、でなければ始終うまい事ばかり持掛けて來る樣々なボーランド人と云つた連中だつた。私は何もかも憶えてゐる。この血の池地獄で、私は自分に閉籠つて、孤獨な生活をしてゐたが、朝から晩まで所謂「友達」と自稱する一味がぐるぐる卷きに取圍んで、怖しく恭順の意を致すばかりか、私の財布を狙つて、殆ど崇拜せんほどの騷ぎだつた。私達は一緒になつて、隨分と色んな汚らはしい眞似をした樣に思ふ。他の同宿人たちが、本氣で心配して吳れた程だつた。と云ふのは、時に我慢のならぬほどに私達の惡戲や痴愚が募つても、矢張り慇懃に扱つて吳れたといふ意味である。更に白狀するなら、私はよく、シベリヤ流刑を夢に描いたものだつた。私は全く、首を縊る氣になるほど退屈してゐた。本當に首を縊らなかつたのは、矢張り何かしら希望をつないでゐたからだと思ふ。一生を通じて、同じことが言へる。當時私は神學に凝つてゐたものだつた。勿論本氣にである。少しはそれで氣が紛れたが、暫くすると前より却つて退屈になつた。私の公民意識と云ふものは結局、四隅に爆裂彈を仕込んで、何もかも一どきに爆破してしまへと云ふことにあつたが、これとて唯さうする價値があるとすればの話で、もともと私は何の怨恨を抱いてゐる譯でもなく、退屈まぎれにさう考へただけのことである。私は決して社會主義者ではない。私はそれを一種の病氣と考へる。失業して、その家族とともに私達のホテルにまで落込んで來たドブロリューボフ博士は、曾て「公民的エネルギイを增進する水藥が無いものでせうか」といふ私の冗談半分の質問に答へて、「公民的〔民事〕の奴はちよつと難しいね。だが刑事の方なら譯はなからう」と言ひ、腹の空いた身重の妻君と二人の娘を抱へてひどく憔悴してゐながら、それでもこの自分の洒落に內心得意げに見えた。全く、この內心の得意さといふ奴が有り餘つてでもゐなかつたら、誰も生きてゐようとは思ふまい。

その後更に三日經つて、私はゴローホヴァヤの家に戻つた。母親は包を抱へて何處かへ出て行き、亭主は勿論居ないし、私とマトリョーシャの二人きりだつた。窓（中庭に面してゐる——）は開いてゐた。この家にはいつも職人連中が住んでゐるので、どの階からも一日ぢう手槌の音と歌聲が聞えて來た。私達は一時間ほどさうしてゐた。マトリョーシャは自分の物置部屋の腰掛に坐つて、私に背を向けて何やら針仕事をしてゐる。やがて急に、小さな聲で歌ひはじめた。とても小さな聲で。——それは彼女によくあることだつた。私は時計を出して見た。二時だつた。心臟が激しく打ちはじめた。私は起ち上つて、そろそろと寄つて行つた。その部屋の窓にはゼラニウムの鉢が並んで、太陽が眩しいほど輝いてゐた。私はすぐ傍へ行つて、床に腰を下した。彼女はびくつとして、始め案外なほどの恐怖を感じたらしく、いきなり跳び退くやうに腰掛を立つた。私はその手を取つて接吻し、無理にまた掛けさせて、ぢつとその眼に見入つた。私が手に接吻したので、突然彼女はまるで小さな子みたいに笑ひ出した。が、それも一瞬間だけのことで、すぐまた、ひどい勢で跳び立つた。今度は恐怖心をありありと見せて、痙攣がその顏を掠め過ぎた。怖いほど動かぬ眼でぢつと私を見詰めてゐるうちに、唇が泣き出しさうにぴくぴくしはじめたが、泣聲は立てなかつた。私は再びその手に接吻して、膝のうへに抱いてやつた。すると急にからだぢうを突張つて、羞しさうな微笑をしたが、それは變に歪んだ笑だつた。羞恥で顏ぢう眞赤になつた。その間、私はしよつちう何か囁きながら、笑つて見せた。

その時急に起つた奇妙な現象が、私をひどく驚かせた。私はそれを決して忘れる時があるまい。少女は兩手を私の頸に卷いて、いきなり自分から激しく私に接吻し出したのである。うつとりとした情感が、その顏にあらはれてゐる。私は殆ど怒氣を覺えて立上つた。こんな小つぽけな子供がと思ふと、とても厭な氣持がしたのである。が、遽かに可哀相になつて……

ここでその頁がお終ひになつて、文句が急に斷れてゐる。書いてはならぬことが起つたのだ。

全部で五枚のうち、一枚はチホンの手にあつて、今しがた讀み終られ中途で斷れてしまつたのがそれであるが、殘りの四枚はまだスタヴロギンの手にあつた。チホンの問ふ樣な眼を見ると、彼は待ち構へたやうに續きを渡した。

「こりや拔けてゐますね」と、チホンは檢べながら聞いた、「そら、これは三枚目ですよ。今度は二枚目です。」

「左樣。三枚目です。だが、その……その二枚目の方は、今檢閲中なので」スタヴロギンは早口に、手際の惡い薄笑ひを浮べて答へた。彼は寢椅子(ディヴァン)の隅に掛けて、熱つぽい眼で絕えずチホンの讀む眼を追つてゐたのである。――「いづれお手にはいる時もありませう。……その時が來れば」と、親しげな身振を出さうとして出し損ねた間の惡さで、彼は附け足した。笑顏を見せたが、見るも憐れな樣子だつた。

「さうですか。ではもう、二枚目も三枚目も、結局同じ事です……」と、チホンは言ひ、まだ何か言續けようとすると、

「何ですつて。同じだとは何故ですか」とスタヴロギンがひどく急き込んで、それを遮つた。――「斷然そんな事はありません。ははあ、愈々坊さん根性が出ましたね。何はともあれ穢いものを嗅ぎ附けたがる、例の癖が。全く坊さんほど刑事の適任はあるまい。」

チホンは默つて眼を注いでゐた。

「いや、御安心下さい。その娘が馬鹿で、私の行爲を誤解したと云つて、何も私のせゐではありはしません。……何にもありはしなかつたのです。爪の垢ほどのことだつて。」

「それは結構でした」――チホンは十字を切つた。

「お話しすれば長いことです。……つまり、つまりそれは、心理的な行違ひに過ぎなかつたのです……」

さう言つて、ぱつと赤くなつた。嫌惡、悶え、絕望、そんな感情がその顏にまざまざと浮んだ。斷ち切つた樣に默つてしまつた。長い間、二人は口も利かず互ひに見もせずにゐた。一分間以上もそのままだつた。

「如何でせう。先をお讀み下すつた方がいい樣ですが」と彼は、額の冷汗を指で機械的に拭きながら言つた。――「そしてどうぞ、私の方を見ないでゐて戴きたい。……何だか、夢を見てる樣な氣持です。……で、どうか、この堪忍袋の緒を切らせないで下さい」と、囁く樣に附加へた。

チホンは急いで眼をそらすと、三枚目を手に取上げて、今度は途中でやめずに終まで讀み續けた。スタヴロギンが渡した殘りの三枚には、中斷された個所はなかつた。けれど、三枚目も矢張り中途で始つてゐた。それをその儘、次に載せて置く。――

……それは本當に怖しい時であつた。非常に烈しい恐怖とも言へないけれど。その朝、私はとても陽氣になつて、誰にも彼にも氣味の惡いほど親切にしてやつたので、例の一味の連中は頗る滿悅した。だが私は連中を振り棄てて、ゴローホヴァヤの家へ出掛けた。まだ昇らぬうちに、玄關の段の所で彼女に出會つた。八百屋まで使に行つた歸りだつたが、私の姿を見るとひどく喫驚りして、いきなり階段を駈け上つて行つた。それはもう驚きどころではなく、恐

怖のあまり身體が硬張つて、口も利けないのである。私がはいつて行くと、あんなに「がたびし」と駈け込んで來たと言つて、もう母親に打たれてゐた。この言葉で、娘の恐怖の眞相がうまく蔽はれた形である。さう云ふ次第で、今の所は先づ無事であつた。彼女は何處かに隱れて、私のゐる間出て來なかつた。一時間ほどゐて、歸つて來た。

が、夕方になると、居ても立つても居られぬ不安がやつて來た。それはもう、今までとは較べ物にならぬ程烈しかつた。何よりも氣に懸つてゐたのは、怖くなると云ふことである。怖いと自覺することである。ああ、こんな途方もない、厭らしいことを私はまだ知らない。私は恐怖を感じたことは決してなかつた。生れてから、この時を別にすれば、後にも先にも一度だつて。だが、今度だけは怖くなつた。心臟が本當にどきどきした。私はそれを、謙虚な心から、われと吾心に鞭つて白狀する。出來ることなら自殺もしたらう。しかし私は、自分が死にも値せぬことを感じた。とは云へ、私が自殺をしなかつたのは、何もそんな譯からではなく、矢張り怖いからであつた。人間は恐怖から自殺することもあるが、恐怖から死ねずにゐることもある。自殺が出來ずにゐるうちに、その事自體が馬鹿げて來る。さうかうして夜になると、私はホテルの部屋にゐて心から彼女が憎らしくなつて、殺して仕舞はうと決心した。夜が明けると、その心算でゴローホヴァヤの家へ急いだ。途々、どうして殺してやらうか、何と罵つてやらうかと思ひ續けた。何よりも、あの微笑を思ひ出すと憎惡がこみ上げた。あの何か思違ひをして、私の頸に抱きついて來た時のことを思ふと、何とも云へぬ汚辱感が湧き上つて來た。だが、フォンタンカまで來たとき、急に氣持が惡くなつた。のみならず私には、もつと怖しい考へが新たに湧いて來た。それは、私がはつきりと意識したが故に怖しいのだ。そのまま取つて返すと、ぷりぷりしながら横になつた。だがもうそれは恐怖の最後の段階で、あの娘を憎らしいとも思はなくなつてゐた。もう殺す氣は無くなつてゐた。これがつまり、フォンタンカで私の意識に上つた新しい考へなのである。その時私は生れて始めて、恐怖の度合がひどく強い場合には、憎惡などは逐拂はれてしまふこと、侮辱した者への復讐感さへも吹き消されてしまふことを曉つた。

正午近く目が覺めて見ると、割合に頭がはつきりしてゐた。昨日の感覺の烈しさに、われながら驚かされさへもした。殺さうなどと考へたことが恥しくなつた。とは云へ氣持はまだ怪しく疼いてゐて、ひどい嫌惡に苛まれながら矢張りゴローホヴァヤの家に行かずには居れなかつた。その時、誰かを摑へて喧嘩がしたくてたまらなかつたことを、いまだに憶えてゐる。しかしその喧嘩は、非常に眞劍なものでなくてはならなかつた。所が、ゴローホヴァヤに來て見ると、私の部屋に思ひも掛けぬニィナ・サヴェリエヴナの姿を見出した。これは例の小間使で、一時間近くも私を待つてゐたのだ。私がちつとも可愛がつてやらないので、かうして自分でやつて來るのだが、默つて來たのを私が怒りはしまいかと、少々びくびくしてゐた。そんな風にして、いつも來るのである。が、その姿を見ると、御當人よりも私の方がひどく嬉しくなつた。まづ美人の方で、その内氣さが又、町人階級が大いに有難がる例のタイプだつたから、お主婦さんなぞはもう大分前から、私の前で大層褒めちぎつてゐたものである。私が來たのは、丁度二人で珈琲を飮んでゐる所で、何か面白い話でもあつたと見えお主婦は非常な御機嫌だつた。隣の部屋の隅に、マトリョーシャの姿が見えた。棒立ちになつたまま、上眼づかひに、母親や客の方をぢつと見てゐる。私がはいつて行つても、此間のやうに隱れもせず、逃げ出しもしなかつた。このことが妙に心に燒け着いて、ふつと胸を衝いた。一目見て、彼女がとても窶れて、どうやら熱があるらしいことも分つた。私はニィナをひどく可愛がつてやつたので、歸るときにはすつかり浮々した樣子だつた。私も一緒に外へ出たが、それから二日と云ふもの、ゴローホヴァヤへは行かなかつた。相變らず退屈ではあつたが、飽々して行く氣にならなかつた。

そのうちに到頭、何もかも一ぺんにお終ひにして、ペテルブルグを出て行つた方がいいと心に決めた。そこまで來てしまつたのである。で、部屋を斷りに行くと、お主婦は心配で何も手に附かぬ樣子だつた。マトリョーシャがもう三日まへから病氣で、毎晩うなされ續けだと云ふのだ。言ふ迄もなく私は直ぐにどんな讒言を言ふのかと尋ねた。(私達はひそひそ聲で、私の部屋で話をした。――)するとお主婦は、何か怖いことを見ると見えて、『神樣を殺した』つ

て言ふのですよ、と私の耳に囁いた。私が金を出すことにして醫者を呼ばうぢやないかと言つても、お主婦は承知しなかつた。『別に大したこともありますまいよ。ぢつとして寢てゐないで、つい先刻も一走り買物に出て行くほどですもの』と言ふのである。私はマトリョーシャと二人きりで話して見ようと決心した。お主婦が五時頃にはペテルブグ區まで用事があると言ふのを聞いて、それではまた夕方出直さうと考へた。

それが何故か、何をしようとするのか、自分でもまるで分らなかつた。

町の食堂で夕食をして、きつかり五時十五分過ぎに戻つて來た。私はいつも、自分の鍵を使つてその家にはいることにしてゐた。マトリョーシャのほかには、誰も居なかつた。彼女は物置部屋の衝立の蔭の、母親のベッドに寢てゐたが、私の足音を聞くとそつと覗いた。私は知らない振りをしてゐた。窓はみな開けひろげてあつた。むつとする空氣が暑いほどだつた。少時室内を歩き廻つて、褥椅子に掛けた。何もかもお終ひまでちやんと憶えてゐる。マトリョーシャに話しかけずに、ぢつと苦しめてゐるのが、何故か知らないが非常にいい氣持だつたのだ。まる一時間ほど、さうして待つてゐると、到頭彼女の方が衝立から飛び出して來た。跳ね起きて兩足を床に落す音も、急いでこちらへ來る足音も、ぢつと私は聽いてゐた。そして彼女は、私の部屋の閾際に姿をあらはした。彼女の方から出て來たのを頗る滿足に感じるほど、私は卑しい心でゐたのだ。何もかもが、何と下劣で、吾ながら何とさもしい氣持に成下つてゐたのだらう。彼女は立止つて、無言のまま私を眺めた。あの時以來、近々と見ることもない間に、本當に窶れ切つてゐた。顏はかさかさにひからびて、頭の中にはひどい熱が出てゐるに相違ない。眼を大きく開けて、まじろぎもせずに見詰めてゐる。その樣子が始めの中、腦味噌の足りない好奇心からだと私には思へた。私は坐つたまま、ぢつと動かずに見返した。すると不意にまた、憎惡が湧いて來た。所が間もなく、マトリョーシャは少しも私に恐怖を感じてゐないばかりか、寧ろ熱に魘されてゐるのではあるまいか、とも思へて來た。しかし、矢張り魘されてゐるのではなかつた。頑是ない幼けのちつとも無い子供が怒るときによく見せるあの樣子で、急に私の方へ向けて蔑すむしるしに首をしきりに振つて見せるかと思ふと、今度は小さな拳骨を作つて、その場から私を追ひ立てようとした。それを見たとき、始めのうちは可笑しかつたが、段々堪らなくなつて急に立ち上ると、怖る怖る近寄つて行つた。とてもそんな小さな子には見ようとしても見ることの出來ぬ慘めな絶望の色が、その顏に浮んでゐる。そして絶えず小さな拳骨を突出し、いやいやをして見せる。私は氣を配りながら、二言三言話しかけた。それもすつかり怖氣づいてゐたので、猫撫聲で殆ど囁かんばかりに言つたのである、が直ぐに、そんな事を言つてもとても分つては呉れまいと氣が附くと、愈々怖くなつて來た。と、彼女は不意に、あの時の樣に兩手で顏をかくして逃げ込んだ。そして向ふを向いて窓に凭り掛つた。私もくるりと背を向けて、窓際に腰を下した。何故私がその時出て行かずに、そこで待つてゐたのか自分ながら分らない。確かに私は、何かを待つてゐた。ひよつとしたら私は、暫くその儘でゐて、やがて躍り上つて彼女を殺したかも知れないのだ。どうせ絶望に終ると極つてゐるからには。

暫くするとまた、彼女の急ぎ足が聞えた。それが、板敷の廊下に出る扉口の方へ行く。そこからは階段を傳はつて下へ降りられるのだ。私は急いでそこまで出て見た。何やら色んなものが置いてある小舍に隣つて、鷄小屋とでも云つたやうな物置がある。そこへはいつて行く彼女の後姿が、ちらりと見えた。窓際に戻つて腰を下すと、また呪はれた考へが頭を掠めた。どうしてそんな事が思ひ浮んだのか、何故別の事が浮んで來なかつたのか、いまだに私は分らずにゐる。蟲の知らせかも知れない。勿論、ふと頭を掠めたそんな考へを、本氣で信じる譯には行かなかつた。『が、しかし』……何もかも、私は怖しいほどはつきり憶えてゐる。胸の動悸がひどかつた。

間もなく私はまた時計を出して、出來るだけ正確に針を讀んだ。何故そんなに正確に見たかつたのか、私は知らない。それればかりでなく、あの時は何もかもはつきりと見て置きたかつた。そのお蔭で、今でもかうして眼をつぶると、あの時のことが一つ殘らず、つい今しがたあつた事の樣にまざまざと浮び出るのだ。だんだん暗くなつて來た。頭の上を蠅がぶんぶん云つて、しきり無しに私の顏にとまつた。私はそれを捕まへて、指につまんで窓の外に放した。ひ

どい音を立てて荷馬車が中庭に引込まれた。とても大きな聲で（もう大分前から）、中庭の隅の窓で職人が歌つてゐた。仕立屋だつた。せつせと仕事をしてゐる姿が、私の方からは見えた。先刻玄關を通り拔けて階段を上つて來たとき、誰にも出會はなかつた以上、勿論降りて行くときにも人目にかかつてはまづい、とそんな考へが浮んで來た。で私は注意して椅子をずらせて、宿の人の目の達かない場所に坐つた。何といふ卑劣なことだ。本を手に取つて見たが直ぐ投げ出して、ゼラニウムの葉にゐる小さな赤味がかつた蜘蛛を見詰めた。そんなことでボカンとしてゐた。が、私は、最後の瞬間までですつかり記憶してゐる。

不圖、時計を出して見た。娘が出て行つてから二十分經つてゐる。しかし私は、更に十五分きつかり待つて見ることに決めた。ひよつとしたら、もう歸つてゐるのかも知れないと考へた。うつかりして聞漏したのかも知れない。：だが、そんな事はあり得なかつた。この死の樣な靜寂の中で、私は小蠅の呻りをさへ一々聞分けられるではないか。すると急にまた、動悸が高く打ちはじめた。私は時計を出して見た。まだ三分早い。胸の動悸が痛いほどだつたが、兎に角決めた時間を坐り通した。そこで私は立ち上り、帽子を被り、外套のボタンを掛けながら、私の來た形跡が殘つてはゐまいかと、部屋中を見廻した。椅子は前の通りに、窓際に引つぱつて置いた。やがて私は扉を開き、そつと自分の鍵を使つて錠を下ろして、物置の方へ歩いて行つた。戸は閉ぢてゐたが、錠は下してなかつた。もともと錠前の利かぬことを私は知つてゐたのだが、開けて見る氣はしなかつた。爪先を立てて、上の隙間から覗かうとした。爪先で立つたらこの隙間に眼が達くだらうかと考へてゐた自分の智力が如何に澄み切つてゐたかをはつきり示さうが爲であり、また從つて、私が狂人ではなく、立派に責任を負ひ得ることを否が應でも實證せん爲である。私は長いあひだ隙間を覗き込んでゐた。それは、中が暗かつたからである。しかし、眞暗闇ではなかつた。で私はやがて、なる樣になつたことを、すつかり見屆けた。……

そこで私は、立去つてもいいと思つたので、階段を降りた。誰にも出喰はさず、誰一人として私を見附けたものはなかつた。三時間後、私たちは皆上衣を脫いで、ホテルの部屋でお茶を飲みながら、古カルタに夢中だつた。レビャトキンは詩を朗讀した。皆わいわい喋つてゐた。まるで故意（わざ）とみたいに好都合で滑稽だつたが、普段の樣に莫迦げてはゐなかつた。キリーロフも居た。ラムの壜は出てゐたけれど、誰も飮む者はなかつた。尤もレビャトキンだけは橫眼で狙つてゐた。プローホル・マーロフは、「ニコライ・フセヴォロードヴィチが機嫌がよくて憂鬱な顏をしてゐないと、皆まで陽氣になつて、なかなか尤もらしいことを喋る」などと言つた。つまり私は、その時自分が陽氣で上機嫌で朗らかで、尤もらしいことを喋つてゐたことに氣づかずにゐたのだ。然し自分が、己れの解放の悅びのためには何物をも顧みぬ下劣極まる卑怯者であり、もはやこの世でもあの世へ行つてからも決して立派な人などになる事はあるまいことを、その時も私は知り拔いてゐた。それのみならず、私は「自分の臭さは匂はぬ」と云ふユダヤの諺を思ひ出してさへゐた。何故なら、如何に自分が卑劣漢だと感じたにせよ、恥しいとは思はず、また殆ど氣にもならなかつたからだ。で、お茶を飮み、連中と無駄話をしながら、生れて初めて嚴重に自分を定義して見た。——自分は善惡を知りもせず感じもしない。それも自分がさう云ふ感性を喪失したばかりでは無いので、もともと善も惡もありはせずに（さう考へると嬉しかつた）、あるのは偏見だけなのだ。そりや私だつて、あらゆる偏見をきれいに捨て得る。だが、それをきれいに捨て得た瞬間は、破滅の時なのだ。……これは生れて初めての意識的な定義づけだつたが、それもお茶を飮みながら連中と莫迦話をし莫迦笑ひをしてゐた時にやつたのである。その代り、みんな憶えてゐる。古臭い、誰でも知つてゐる考へが、遽かに全く眼新しいものに映ずることがよくある。時として人生五十を過ぎてさへ。

とは云へ、私は絕えず何かを待つてゐた。案の定、かれこれ十一時近く、ゴローホヴァヤの家の門番の娘が駈けつけて、マトリョーシャの縊死の報せを持つて來た。その娘について行つて見ると、お主婦（かみ）は何故私を呼びに寄越したのか、自分乍ら分らないと云つた顏をしてゐた。あの手合がかう云ふ場合に臨むと必ずする樣に、彼女が喚き立て大

騒ぎをしてゐたことは言ふ迄もない。彌次馬もゐたし、巡査もゐた。暫くゐて、歸つて來た。

その間、別に私の心配する樣なこともされなかつたが、ただ訊くだけの事は訊かれた。が、娘が病氣で、熱に浮かされてゐたこと、醫者を呼ぶ費用を持つてやらうと申出たことの他、私は何の證言もしなかつた。例のナイフの事も何やかと訊かれた。お主婦は娘を折檻したけれど、それは別に何でもありますまいと言つて置いた。私が晩に來たことは、誰も知らなかつた。それで片が附いた。

それから丸一週間、私はその家に行かずにゐた。やがて部屋を斷りに行つた。お主婦はまだ泣いてはゐたが、また元通り襤褸を一杯散らかして、縫仕事を始めてゐた。「貴方のナイフのお蔭で、あんなお仕置をしたのですよ」と、私の顏を見ると言つたが、それもそれを言ひたいばかりに私の行くのを待つてゐた風で、大して根に持つてゐるとも見えなかつた。ああ云ふ曰く附きの部屋でニィナ・サヴェリエヴナのことを褒めて呉れた。歸りしなに、心づけとして五せた。お主婦はお別れに、もう一ぺんニィナ・サヴェリエヴナのことを褒めて呉れた。歸りしなに、心づけとして五ルーブル置いて來た。

先づ第一の問題は、退屈で狂氣になりさうなことだつた。ゴローホヴァヤの出來事にしても、危險が去るとともに他の色んな事と一緒に、すつかり忘れて了つたに違ひないのだ。兎も角も忘れずにゐるのは、そのいきさつを大分暫くの間、意地惡く回想してゐたからである。傍の者にも、當れるだけは意地惡く當り散らした。何やら知らず、無性に自分の生活を片輪にしたくてならなかつたのも、丁度その頃のことだ。それも出來るだけ醜惡にでなければならなかつた。ピストル自殺を考へてゐたのは、既にその一年も前からのことである。所がよい考が浮びあがつた。

方々の裏店で下女同樣に働いてゐた脚の惡いマリヤ・チモフェーヴナ・レビャトキナは、その頃はまだ狂女ではなく、ただ氣ちがひ染みた白痴に過ぎなかつたが、（仲間が嗅ぎつけた所では）ぞつこん私に惚れ込んでゐたものである。ふと、その彼女が眼につくと、いきなり結婚の決心をしてしまつた。スタヴロギンともあらうものが、こんな下の下の動物と結婚するのだと思ふと、私の神經もさすがにときめいた。凡そこれ程の出鱈目なことは、夢想も出來なかつた。だがそれも、他ならぬあの頃の出來事と思へばこそ、了解も行くのである。とは云へ私のこの結婚は、必ずしも「毒食はば皿まで」といふ譯だけでもなかつた。何分あの頃のことである。あの頃のことで、自分乍ら今日になつても分らずにゐる——これが本音である。婚禮に立會つて呉れたのはキリーロフと、丁度ペテルブルグに來てゐたピョートル・ヴェルホヴェンスキイ、それから當のレビャトキンと、今では故人になつたプローホル・マーロフだつた。その他に誰一人知る者はないし、この四人も沈默を誓つた。私は、この沈默が醜惡なものに思へてならず、自分ふらふらしてゐるのだ。

結婚式を濟ますと、私は田舍の母の所へ行つた。氣散じのためである。田舍の町に、自分が狂氣してゐるとの想念を植附けて來た。この想念は、今になつても拔け切らず、私に毒なことは疑もない。それに就ては後段に說明するつもりだから、今はこの文書のため一應記すにとどめて置く。それから私は外國へ行つて、四年ゐた。

近東へ行き、アトスの聖山で八時間の晩禱を修した。エヂプトへ行き、瑞西に滯在し、アイスランドにまで行つた。ゲッチンゲンでは一年間大學に通つた。最後の一年のあひだに、巴里では或る有名なロシヤ人の家庭の知遇を得、また瑞西では二人のロシヤ少女と親しくした。今から二年ほど前のこと、フランクフルトの或る文房具屋の前を通りすがつたとき、賣物の寫眞にまざつて一枚の小さな寫眞を見附けた。優美な子供服を着た少女がうつつてゐたが、それがマトリョーシャにそつくりだつた。ふらふらつとそれを買取ると、ホテルに歸つてカミンの上に載せた。それなり、かれこれ一週間も置放しになつてゐたが、その間一度だつて眺めても見なかつた。フランクフルトを發つとき、そのまま忘れて來た。

此處にそれを記すのは、私が自分の思出をどの程度まで征服することが出來、また無感覺になり得たかを證據立て

る爲である。何やかやの思出を皆一つに引くるめて、私は顏をそむける。するとそれらは皆一どきに、私の欲するまゝに大人しく消え失せるのを常とした。回顧は私にとつて常に退屈だつた。私は、世間並の人のやうに、過去を哀惜する氣にはなれなかつた。況してやそれが私にとつて、自分の全存在と同じく嫌惡に滿ちたものであるからには尙更であつた。マトリョーシャのことにせよ、現にその肖像をカミンの上に置忘れて來る程だ。

一年ほど前、獨逸を旅行してゐたとき、私はうつかり乘換驛を通り過して、違ふ線に連れて行かれた。次の驛で引返すことになつた。午後の二時過でいい天氣だつた。小つぽけな獨逸町である。宿屋を敎へて貰つた。次の汽車は夜の十一時だから、大分待たなければならない。急いで行く當てもなかつたので、寧ろこの冒險が嬉しかつた。小さなひどい宿屋だつたが、綠葉に埋もれ、四圍には花壇が作つてあつた。鼻のつかへさうな部屋に通された。腹一杯に詰込むと、前夜汽車の中で一睡もしなかつた疲れが出て、食後かれこれ四時頃からぐつすり寢込んで了つた。

そこで、全く思ひもかけぬ夢を見た。流石の私も、そんなのは初めてだつた。尤も私の見る夢は、いつも莫迦げてゐるのか怖いのかに極つてゐる。ドレスデンの畫廊に、カタログに依れば確か『アシスとガラテア』とか云ふ、クロード・ロレンの繪がある。何故か私は、いつもその繪を『黃金時代』と呼ぶことにしてゐた。以前にも一見したことがあつたのを、つひ三日ほど前丁度汽車で通つた序でに、もう一度見た。それを見るため、態々出掛けて行つた。ひよつとすると、ドレスデンに寄つたのは唯それが目當だつたのかも知れない。夢に現れたのはこの繪である。それも繪としてでなしに、まるで何か知ら體驗のやうにしてである。

とは云へ、一體それがどういふ夢なのか、自分でも分らない。あの繪と全く同じに、希臘のアルキペラグ群島の片隅だ。時代もどうやら三千年の昔らしい。青々と可愛らしい海波、島、巖、花の咲く濱邊、うつとりと霞む遠景、招く落日——とても言葉で傳へることは出來ぬ。ヨーロッパの人類が、不圖その搖籃を思ひ出す所だ。そんな考へが、私の胸の中を生れ故郷の愛で一杯にした。これは人類にとつて地上の樂園、神々は天から降りて人間と交はり、神話の最初の場面がそこに開く。素晴しい人々がそこには住む。幸足り罪知らぬ人々が、睡りまた起きあがる。その愉しい歌聲は森に滿ち、有り餘る無垢の力の迸るところ、愛は生れ、素直な悅びが湧く。それを感じ取るとともに私には彼等が夢寐にも思ひ描かぬ大いなる三千年の生の行手が豫見し得る樣に思へて、われ知らず私の胸は高鳴つた。胸が高鳴り、到頭彼等を愛し得たと知つて、私はどんなにか嬉しかつたらう！　太陽は素晴しい子等を見る悅びに、その光を島々や海のうへに注ぎ流す。ああ、摩訶不思議な夢、崇高な迷妄よ。有りとある夢のなかで、最も嘘らしい夢。だがその爲には、全人類は生も力も惜みなく投げ出すであらう夢。その爲には、かさかさに干上ることも敢て厭はぬであらうし、又その爲に、豫言者たちは十字架の上に虐殺されて來た。この夢が無かつたなら、人間は生きようとは望むまいし、死ぬことだつて出來はしない。さう云ふことと總てを、私はこの夢にまざまざと感じ取つた。繰返して言ふが、私には自分の見た夢が何なのか全く分らない。夢に見たのは唯感覺だけであつた。しかし、やがて睡から覺めて生れて初めての涙に濡れた眼を見開いた時にも、私はまだその巖や海や落日の光をありありと見る樣に思つた。私はこの涙を憶えてゐる。嬉しかつたことも、少しも羞しくはなかつたことも、矢張り覺えてゐる。未だに何やら分らずにゐる幸福の感覺が、私の心臟を刺貫いて、きりきりと痛い程だつた。幾んな夕暮時になつてゐた。私の小さな部屋の窓には、鉢植の花の葉を透して落日のきらきらかな斜光が、大きな束をなして射し入り、私の全身を浸してゐた。過ぎ去つた夢を追はうとするやうに、私は急いでまた眼をつぶつた。が、その時不意に、きらきらする光の波の中に、何かしら小さな汚らしい斑點（しみ）を見た。……つまりこれなのである。かうして始まつたのである。その斑點は、見る見る何かの形になり、いきなり一匹の汚らしい、赤ちやけた蜘蛛の姿に現じた。私は直ぐ、矢張り同じ落日の斜光の中で、ゼラニウムの葉にとまつてゐた奴を思ひ出した。私は總毛立つて起き上り、寢床の緣に腰を掛けた。それから、こんな事が起つた。——

目の前に、マトリョーシャが（ああ、だが現實にではない。若しもそれが、本當の幽靈であつて呉れたら！　あの

時以來一度でも、唯の一度でも、いや一秒間でも、ほんの一瞬の間でも肉ある生ける姿を現はして呉れ、話掛けることが出來たなら！）、痩せこけて熱つぽい眼附で、あらはれた。あの時私の部屋の閾に立つて、汚らしい拳固を上げては此方へいやいやをして見せた、丁度そのままの姿である。こんな苦しい物を見たのは後にも先にもこの時だけだ。分別も碌々つかぬ痛々しい生物の、慘めきはまる絶望。それが、私の方へ威しの拳を上げながら——（だが、一體何の手出しが出來ると云ふのか！）而も、責めるのは勿論自分だけなのだ。……こんな物を見たのは、後にも先にも一度だつてない。私は身動きもせず、時間も忘れて、夜が更けるまで坐つた儘だつた。今私は、出來るならその時のことを悉く解釋して、何もかもはつきりと傳へたい。それは謂ふ所の良心の苛責であらうか。後悔であらうか。私は知らぬ。今になつても皆目分らぬ。とまれ私にとつて堪へ難いのは、唯この映像だけなのだ。つまり、後でも先でもないあの瞬間、閾の上に立つて、小さな威しの拳固を振上げたその瞬間の彼女の姿が、あの一瞬間だけが、あのいやいやをして見せた頭だけが、身も世もあらず堪へがたい。この身振り、つまり懸命の威しの身振りは、私には滑稽どころか心から怖しくなつた。私は辛くて辛くて、狂氣になりさうだつた。それを見ずに濟むことなら、喜んでこの身を八つ裂の刑にも任せただらう。自分の罪も、彼女も、その死も、更々悔む氣持はない。ただあの瞬間だけが、私には堪らない。どうしても堪らない。何故なら、それ以來あの瞬間は來る日も來る日も私にあらはれ、私は告罪を眞面に受けてゐるからだ。それ以來私が堪へ難いと云ふのは、つまりこれである。そりや以前にだつて我慢がならなかつたには違ひないが、唯どう云ふ譯だか、それ以來といふもの毎日あらはれる樣になつたのだ。それは一人手に現はれるのではなく、私が呼び出すのだ。性に合はぬことは分り切つて居ながら、呼び出さずには居られないのだ。ああ、幻覺の中でもいい、一度彼女の現實の影を見ることが出來たなら！　唯の一ぺんでも、あの時のやうな大きい熱つぽい眼で、私を見詰めて呉れたなら！　私の眼に見入つて、私の思ひを見出して呉れたなら。……莫迦げた夢だ。そんな事があるものか。

私の生涯の思出の中から何故これ一つだけが、こんな現象を生むのだらう。實に色んな思出があるし、その中には人の審きの前に立たすと遙かに罪深いものも數多いではないか。それでゐて、他の色んな思出は高々私に憎惡を催させるに過ぎない。その憎惡にせよ、今のこんな狀態を契機にしてゐるのに過ぎないではないか。前には私は至極冷然として、思出は何もかも一まとめに忘れ棄てて、人工的な平安を偸んで居られた。

その後私は、殆ど此の丸一年間と云ふもの當途もなく流浪し廻つて、絶えず何かに夢中になつてゐようと力めた。今だつて、さうしようと思ひさへすれば、マトリョーシャを遠ざける事は出來る筈である。私は元通りに、自分の意志を統御し得るまでになつてゐる。だが大切なことは、さうしようとは決して思はぬことだ。今も欲せぬし、これからも欲する時はあるまい。かうして狂氣するまで續いて行くのだらう。

その後二ヶ月して瑞西にゐたとき、恐らく一種の反作用としてであらうか、それとも生存のための有機組織の闘ひでもあらうか、私は情慾の發作を感じた。それは又、ずつと昔の私に見られた樣な、兇暴な激情を伴つてゐた。即ち私は、新しい罪——重婚の罪を犯さうとする、烈しい誘惑に襲はれた。（何故なら既に私は妻帶してゐるから。）しかし私は、もう一人の少女の忠告によつて、危く免れることが出來た。この少女には何もかも打明けてゐたのである。——そんなに結婚したくてならぬ當の相手を、實は少しも愛してゐる譯ではないことも、決して何人も愛することはあるまいことも、唯さうした願望の他には何一つないのだと云ふことも。……且つ、この新しい犯罪にしても、マトリョーシャを拂ひのける力はなかつたに相違ない。

この樣な次第で、私はこの文書を印刷に附し、その三百部をロシヤに携行すべく決意した。何れ時機を見て、警察當局及び地方官憲に發送すると同時に、各新聞社にも送附してその公表を依頼するであらう。また、ペテルブルグやロシヤ各地の知人にも配布するであらう。同じく外國にも、その飜譯が現はれるであらう。假令それが全然無意味であらうとも、兎に角私は發表する（即ちこの文書だ。）私は法律上の迷惑を蒙ることは萬あるまいと考へる。あつても

大した事はあるまいと思ふ。何となれば、私一人が一身上の陳述をしたに過ぎず、告發人が無いからである。のみならず全く證據は無いし、又あるにせよ頗る僅少である。且つ、私の精神的異常に關する周圍の人々の考へは仲々根強いものであるし、またそれを利用しての一族の者の奔走は、私の身に加へられるであらう一切の危險な法的追究を消滅せしめるであらう。因みに、私が敢てこれに言及するのは、私が現在完全に正氣であり、自己の情態を知悉してゐることを確證せんが爲である。殘る問題は、この文書により萬事を知つて、人々が私を凝視し、私も亦彼等に凝視を返すであらうことである。私は萬人の凝視の注がれんことを望む。それで氣が樂になるか否か、私は知らない。とまれ私は、この最後の網に縋る。

もう一度言ふ。——若しペテルブルグ警察に懇請するならば、何かの證跡は發見されるであらう。あの町人夫婦は今尙ペテルブルグに居住してゐるかも知れない。あの家を忘れてゐる筈はなからう。家の色は淡青色である。私は何處へも行かぬつもりである。當分は（一二年の間）、私の母親の領地であるスクヴォレシニキから一歩も出まい。要求さるれば、何處へなりと出頭する。

ニコライ・スタヴロギン

三

讀み終るには一時間もかかつたらうか。チホンはゆつくり讀んで行つたし、それに或る個所などは繰返し讀んだに違ひなかつた。例の二枚目の紙を見せる見せぬの問題で、ちよつと揉めたあの時から、スタヴロギンは一言も口を利かずに、褥椅子（ディヴァン）の隅に背中を押しつけたまま、ぢつと待受けるらしかつた。チホンは眼鏡をはづし、稍々ためらつたが、到頭スタヴロギンの方を、おづおづと見た。此方はびくりとして、全身を乘り出した。

「申し遲れてましたが」と、彼は早口に刺々と言つた、「たとへ何を仰言らうと、それは無駄です。もう決心は變へませんから、無駄骨はやめて頂きたい。私は發表します。」

そして、顏を眞赤にして口を噤んだ。

「いや、その事ならもう伺ひました。讀む前にちやんと。」

チホンの調子には、何かしら忿怒の色があつた。この「文書」としての彼の感情は著しく傷けられ、また何ぼ彼でも常に自分を抑制し得る譯ではなかつた。序でに申して置くが、

彼が修道仲間に、「民衆に對して堪へ性を缺く人間」との評判を得てゐたのは、根據のないことでは無かつた。そのキリスト者としての抑制にも拘らず、鋭い忿怒が言葉の節々にひらめいた。

「同じことです」とスタヴロギンは、相手の調子の變化などには眼も呉れずに、刺々と言ひ續けた、「どんなに強く反對されようと、私はもう決心を枉げますまい。それに私は、こんな不器用な文句、それも器用だとお考へならそれでもいいが——こんな文句で貴方の反對なり御懇望なりを、別に催促してる譯ではありませんよ。」——と、彼は變に歪んだ嘲笑とともに言ひ放つた。

「御決心に反對する、乃至はお考へ直しを懇望するなどは、固より致さうとは存じません。貴方の御思想は、いかにも高遠なものです。キリスト教の思想でも、これ以上完全な表白は難しいでせう。貴方が考へ出されたほどのあの愕くべき苦行、また自己を罰する心——これ以上のものを懺悔に望むことは出來ません。ただ、若し……」

「ただ何です?」

「もしこれが本當に懺悔であり、本當にキリスト者的な思想ならば。」

「凝つた言廻しだな」とスタヴロギンは放心したみたいな考へ深さで呟き、起ち上つて部屋をあちこち歩きはじめたが、それに自分で氣附いてはゐない。

「どうも貴方は、御自分の本心以上に自己の姿を暴々しく見せようとして居られる樣です」とチホンは、じわじわと言葉を加へて行く。

「『見せる』ですと? 私は『見せ』などしません。況してや誇示なんかしません。『暴々しく』ですと?『暴々しく』とは一體何事です?」——再び眞赤になり、また眞赤になつた自分に腹を立てた、「そりやこの事實は、慘めな厭らしい不潔極まるものです」と紙片を顎で指しながら、「だが、その賤の賤なるものをして拍進せしめよです。……」

そこで、續けるのが羞しくなつたか、言ひ譯をやる自分を恥辱に思つたのか、急に言葉を切つてしまつた。しかしそれと同時に、よし無意識ながらにせよ明かに苦し氣な風を見せて、この言ひ譯のためにどうしても此場は去れぬといふ、妙な義務に壓し伏せられてゐた。あの二枚目の紙が見せられぬ事を說明する時に彼の吐いた言葉の片言すらも、これから後の話の中には繰返されず、二人ともまるで忘れた風に見えたことは注目に値する。そのうちに、彼は書卓の前に立ちどまつて、象牙の磔刑像をつまみ上げ指でくるくる廻してゐたが、ふと眞中から折つてしまつた。さすがにはつとしたらしく、當惑氣にチホンの方を見たが、まるで凌辱を受けたかそれとも驕傲な挑戰欲に驅られたかの樣に、その上唇がわなないた。

「私は、貴方が何か言つて下さるだらうと思つてゐました。參つたのもその爲です」——一生懸命に自分を抑へてゐる樣な低い聲でさう言つて、十字架の破片を卓に投げ出した。

チホンは急いで眼を伏せた。

「この文書は、致命の傷を受けた心の率直な表白ですね、さう思つて宜しいのですね」——と、彼は念を押す樣に、殆んど熱つぽい口調ではじめた、「左樣、これは懺悔ですね。その自然の欲求が、貴方を組伏せたのですね。貴方によつて辱しめを受けた者の惱みが、貴方を生死の境にまで混亂させた。したがつて貴方にはまだ見込みがある。貴方は稀有の大いなる途に踏み入つたと言ふべきです。當然の汚辱の情を以て、全世界の前に自分を罰しようとなさる。……貴方は敎會を信ぜぬながら、全敎會の審きを求められる。さうなのですね。だが貴方はもう、ここに書いてある事を讀む者皆を、どうやら憎み蔑すんで居られるらしい。そして、彼等に戰を挑んで居られ……」

「この私が、戰を挑むですと?」

「罪の告白を羞しいとは思はぬくせに、何故貴方は懺悔を羞しがりました?」

「この私が、羞しがつたですと?」

「羞しがり、また怖れられた。」

「怖れるですと?」――スタヴロギンは引攣つた様な薄笑ひを浮べ、その上唇は再びわなないたらしい。

「萬人の凝視の注がれんことを望む、と貴方は言はれる。だが、貴方はそれにどんな凝視を返さうと言はれるのですか。貴方は彼等の罵詈を待つて居られる。だがそれは、もつと酷い罵詈を投返さうがためだ。あなたの陳述の或る個所は、妙に誇張した文體が眼につく。どうやら貴方はお自分の心理を弄んで居られ、瑣らぬ事をまで一々捉まへて居られる。その冷酷無恥を以て讀む者の度膽を拔かうといふお心算らしいが、恐らく貴方の裡にはそんなものはないのだ。また一面、悪い情欲や無爲の習慣が、貴方を本物の冷酷漢に、また痴人に變へつつあるのです。」

「痴愚は罪ならず」――スタヴロギンは微かに蒼ざめながら、薄笑ひした。

「時に罪です」――チホンは屈せずに熱心に續けた、「貴方は、闘の上の幻影に致命的に傷つき、酷く惱まされて居られながら、この文書によるとまるでお自分の一番大きな罪が奈邊にあるのかを、知らずに居られる様に見える。それが益々、貴方が自ら進んで審判を求められる人々の前に、貴方の羞恥の身振りを加へることになる。それは一體、貴方のした暴行の冷酷さに就いてですか、それとも、その際に表はされた臆病さのためですか。ある個所ではまるで貴方は、その童女の嚇しの身振りが『可笑しい』所か、死ぬほどの辛さだつたことを、急いで讀む者に呑込ませようと掛つて居られる様だ。だが、その身振は一體、よし一瞬間にせよ貴方に『可笑しく』見えたのですか。左様、それはさうだつたのだ。私は證人に立つてもいい。」

チホンは口を噤んだ。その話振りは、己れの抑制を廢めた人のそれであつた。

「もつと、もつと續けて下さい」――スタヴロギンは促した、「貴方は怒つて居られる。そして……悪口を吐いて居られる。私は坊さんのさうした所が大好きだ。ただ一つ伺つて置きたいのは、これが濟んで(と紙片を顎で示して)、もう十分間もお話をしてゐるのだが、おまけに貴方の悪口まで伺へてゐるのだが、これと云つて貴方は嫌悪なり羞恥なりの様子をお見せにならない。……どうやら貴方は御機嫌斜めでもなく、まるで對等の相手のやうにして私と話して居られる。」

彼はこの間をひどく聲を落して附け足したが、「對等の相手」云々の所は、まるきり思ひ掛けぬ言葉が口を滑つたものの様だつた。チホンの一瞥が、ぎらりと光つた。

「愕くべき人だ」と、一瞬口籠つて彼は言つた、「貴方の言葉は、さういふ場合にも伴りではない。私にはそれが解る。……私が悪かつたのです。私は、貴方に禮を缺きました、實に嫌悪を感じました。だが貴方は、自己刑罰に渇くあまり、私の焦燥には氣附かれてそれを悪口と呼ばれただけで、さうした私の氣持には氣附かれなかつた。自分を、比べ物のない大きな輕蔑に値する者と思ひ込んで居られる。私が『まるで對等の相手のやうに話す』といふお言葉などは、よし無意識に出たものにせよ、實に見事なお言葉です。何も隱さずに申しませう。――私は、知りながら不潔に赴いた大いなる無爲の力に、惑亂したのです。人々が異邦人になるのも無理からぬことです。母國を逃れ離れる人々にも追窮の手をゆるめぬ刑罰が一つあります。それは、あらゆる仕事への欲望があるにせよ、つきまとつて離れぬ退屈、及び無爲に終始せしめる境遇です。だがキリスト者的な信仰は、たとひ如何なる環境にあつても、責任を認めずにゐません。主は貴方にも智を授け忘れはなさらなかつた。これは自分の心に訊いて御覽なさい。何故なら、貴方の智力が、『自分は自分の行爲に對して責任を負ふべきか、負ふべきでないか』との問を設定し得るとき、既に貴方はどうしても無責任ではあり得ぬからです。『誘惑のこの世に來ぬことは難し。されど誘惑の仲介となる者は禍なるかな。』ところで、貴方の、その、罪のことですが、それを犯す人々も多いのです。しかも彼等は廉恥を失はずにこの世に平安な生を送り、それを避け難い若年の咎と觀じてさへ居るのです。のみならず、お棺に片足をつつ込んだ老人の中にも、同じ罪を犯してしかもおどけた心に吾と吾を慰めるものがあるのです。此世は、總てこの様な罪障に滿ち滿ちてをります。ところが貴方は、少々極端なまでに、底の底までを感じ取られた。これほどの深みに及ぶことは稀有のことです。」

「あれを讀まれて　どうやら私を尊敬し始められた様ですね」――と、スタヴロギンは歪んだ薄笑ひをした、「貴方は、貴方は、……人傳てに聞いたのですが、師にはお向きにならない」と、ますます無理な似合はしからぬ微笑に笑み崩れながら附加へて、「この修院では、貴方はひどく評判が悪く被入る。貴方は、これも噂ですが、罪人の裡に何かしら誠實か溫順の影を捉へられるや否や、直ぐに法悦を感じて、自分の方が慙悔したい氣持になられる。罪人の前を駈け抜けて、鼻息を窺ふやうなことをなさる。……」

「そのお言葉にぢかのお返事は致しますまい。が、固より、私が人と調子を合はせて行けぬことは本當です。私はしよつちう、これは私の大きな缺點だと感じてゐます」と、チホンは溜息まじりに言つたが、スタヴロギンが思はず微笑んで眺めたほど、その調子は率直だつた。――「で、この事ですが」と、紙片に眼をやつて、彼は續けた、「貴方がその童女になすつた様な、それほどの大きな怖ろしい罪は、固よりありもせず、また、あつてはならぬ事です。」

「いや、そんな紋切型などはやめませう」――とスタヴロギンは、暫く口籠つたあとで忌々しげに言つた、「私はひよつとしたら、これに書いた程惱んではゐないかも知れませんし、また本當は、大法螺を吹いてるのかも知れません」――不意に、ぱつたりと此處で口を結んだ。

チホンは默り込んだ。スタヴロギンも考へ込んで、頭を垂れながら部屋の中を歩きはじめた。

「その娘さんは」と、思ひ出した様にチホンが訊いた、「その、瑞西で出來かかつた關係を絶たれたとか言はれた娘さんは……今、どこに居られます？」

「この市にゐます。」

また沈默が來た。

「ひよつとしたら私は、貴方の前でひどく自分を讒謗したのかも知れません」と、スタヴロギンは急に　しつこく繰返した、「自分でも、まださつぱり分らずにゐるのです。……それにせよ、貴方が折角挑戰と認めて下すつたのだから申しますが、この告白の粗暴さで奴等に挑戰したつて、一向構はぬではありませんか。それが當り前です。奴等はそれに値ひします。」

「と仰言るのは、人々の同情を受けるより、人々を憎む方が貴方には樂だといふことですね。」

「如何にもお言葉の通りだ。私はもともと開け放しに語る性ぢやないが、どうせかう……貴方に何してしまつたからには……私が、たとひ自分に對する以上ぢやないにせよ、――左樣、ぐんと以上ではないにせよ、少くも自分と同じ程には奴等をてんで輕蔑してゐると申上げて仕舞ひませう。誰一人だつて、私の本心を言ひ當てる奴なんかあるものですか……私が、その讒言を（と、顎で紙片の方をしやくつて――）そんな風に書いたのだが、偶然頭に浮んだ事を單に無恥の誇示に利用したのか、それとも、空想にうかうかと誘はれて、大法螺を吹いただけのことなのか。……」

毒々しげにさう言ひさして、自分の心にもなかつた饒舌に、再び少女のやうに顏を赤くした。彼はチホンの方にくるりと背を見せて卓子の方を振向き、折れた礎刑像の一片をまた撮み上げた。

「私のお尋ねすることに答へて頂けませんか。それも、私だけにと思つて眞面目に。それとも、眞暗な夜闇のなかで御自分に答へられる様な具合に」――何か感動を無理に抑へた聲で、チホンは始めた、「もし萬一誰かが、貴方のこれ（と、紙片を指して――）を赦したとしたら。……それも、貴方が尊敬されたり乃至は怖がつてをられる様な人ではなくて、貴方がまるで御存じのない赤の他人が、何も言はずにそつと此の怖るべき告白を讀んだ上での事だとしたら。……貴方はかうした思念で氣が樂になられるでせうか。それとも矢張り同じ具合でせうか。ひよつとして、お答へになるのが自尊心の手前お辛いなら、何も言はず默つてをられても結構です。お心のなかで考へられるだけでも。」

「樂になります」と、スタヴロギンは小聲に答へた、「もし貴方が赦して下さるのだつたら、ずつと氣が樂になります。」――早口に、半ば囁くやうにさう附足したが、卓子から振返らうとはしなかつた。

「同樣、私も赦して下さる譯ですね。」

「それは、どういふ事です」と、スタヴロギンは振向いた、「貴方が私に何をなすつたと仰言るのです。ああ、さうか。修道院のお作法なのか。むかむかさせる謙遜だな。ねえ、さうした修道院の由緒のあるお作法は、寧ろひどく不細工ですな。それとも、仲々精巧だと本氣でお考へかしら。」——苛々しく鼻息を立てた。「何故こんな所に來たのだらう」と、急にあたりを見廻して、「さう、さう。貴方のこれを折つちまひましたよ。……これは、二十五ルーブルもするんですか。」

「御心配なく」と、チホンが言つた。

「それとも五十もしますかな。何で御心配なくなものですか。折つたり毀したりして置いて、御損をゆるして頂く義理はありません。お納め下さい、五十ルーブルあります」と、金を引出して卓子に置き、「御自分にとはお思ひにならずに、貧乏人やお寺のためと思つてお納め下さい。……」彼は益々苛々して行つた。——「いやもう、何もかも本當を申上げてしまひませう。私は、貴方に赦して頂きたいのです。貴方に赦して頂くとともに、他の第二、第三の方々にも。……だが誰も彼も、私を憎んで憎み切るがいいのです。」

彼の眼はきらきらした。

「で、世間の同情は、とても大人しくは受けてをられぬのですね。」

「とても出來ますまい。私は世間の同情など欲しくはありませんし、一體世間の同情なんぞある筈もないのです。ロにするのも馬鹿げたことで。……所で、私は猶豫は出來ません。私はきつと公表して見せます。……拙宅御訪問の儀は、あらかじめ御免を蒙ります。……私は猶豫は出來ない、とても出來ない……」と彼は、狂氣した様に附加へた。

「私には不安な氣がする」と、チホンは殆どおづおづと口を挿んだ。

「私が敗けるだらうと思はれてですか。奴等の憎惡を耐へ切れまいと思はれてですか。」

「憎惡のことだけではありません。」

「その他に、何がありまず。」

「人々の……嘲笑ひです。」——この半ば嚙かれた言葉は、チホンの耐へに耐へた心の堰を押破つて出た物の様だつた。心の貧しき者はもう堪へられずに、言ふべきでないとはつきり知つてゐる事をまで、口にしはじめたのだ。

スタヴロギンは當惑した。不安がその面にあらはれた。

「さういふ豫感はしてゐました。ですから、私の『文書』を讀まれた後では、定めし私をひどく喜劇的な奴だとお思ひになつたでせう。どうぞ御心配なく、お取亂しなく。私はちやんと豫期してゐました。」

チホンは本當に取亂した風だつた。そして急いで言譯をしはじめたが、勿論それは益々氣まづさを募らせるばかりだつた。

「この様に大いなる業のためには、魂のうちに道德的な安らぎが入用です。苦惱のときにさへ、いと高き輝ける時がバビロンの大混亂の時のやうに、人間同志分らなくなつたのです。……」

「いやそれは、皆ひどく退屈なことですよ。私だつてよく存じてゐます。千萬遍も談じ合はれた問題ですからね……」と、スタヴロギンが遮つた。

「つまり貴方は、目的をお達しになるまいと思ふのですが」と、チホンは漸く、ずばりと言つて退けた、「法律的には殆ど拘束されてはおいでなさらない。これが先づ第一に、人々の嘲笑の眼を貴方に向けさせることになりませう。疑惑を招くことになりませう。一體誰が、この告白の眞の原因を理解するでせうか。いや人々は、故意と理解しまいとするでせう。何故といつて、人々はかうした大いなる業に恐怖を抱く。さういふのに出會ふと不安で堪らなくなつて憎惡し復讐をする。何しろ世間は、自分の汚濁が大好きで、人に掻き廻して貰ひたくないのですから。ですから、何もかも手取早く、嘲笑の的にしてしまふ。彼等にとつて、嘲笑の的ほど手易く滅せるものはありませんからね。」

「もつとはつきり言つて下さい。何もかも言つて下さい」と、スタヴロギンは促した。

「勿論、はじめのうちは恐怖の表情をするでせう。ですがそれは、一種の禮儀のための作り物で、本心には遠いものです。私は何も、純潔な人々のことを言ふのではありませんが、さういふ人達は、自分一人で恐怖し、自分を責めるに違ひありませんが、默つてゐるでせうから他所目には分りません。他の俗人どもになると、自分達の利益を直接に脅かすものには、ひどく敏感で臆病なものです。かういふ人間は、最初に感じる疑惑とか、作り物の恐怖が過ぎた後では、大急ぎで嘲笑に駈けつけるのです。狂人に對する好奇心も手傳ふことでせう。何故と言つて、貴方は反對に人々を嘲笑する力がおありの以上、自分に責任をお取りになれる點で全くの狂人ではなく、却つて嘲笑の對象には持つて來いの狂人ですから。こんなことが堪へ通せますか？　貴方の心は激しい敵意で一杯になり、それが必然的に呪詛に變つて、壞え滅びはしませんか。…不安だと申したのはこれです。」

「ですが貴方は…貴方は御自分で…私は、貴方が人々をそんなに惡い厭はしいものに思つて居られるので喫驚しました」と、スタヴロギンは何か憤然とした樣子で、かう言つた。

「いや私は、人々のことよりも自分を相手に言つてゐるのです」と、チホンは聲を上げた。

「一體貴方のお心の隅には、今ここで私の慘めな姿をひそかに愉しんで居られる樣な、何かの氣持があるのぢやないか知ら。」

「さあね。あるかも知れません。ええ、あるかも知れませんとも。」

「もう結構。では、この手記の中で、私のどんな所が可笑しいのか仰言つて下さい。どこが可笑しいか自分で承知してはゐますが、貴方のその指で、何處とはつきり示して頂きたいのです。そして、も一寸シニカルに願ひませう。何しろ貴方は大のシニックで被入つしやるからな。…一體貴方がた坊さんは、怖るべきシニックですよ。どんなに人々を蔑すんで見てをられるか、御自分でもお分りぢやない。…さあ、ひとつ正銘の本心といふ所を伺ひませう。もう一ぺん申しますが、貴方は怖るべき奇人で被入る。」

「第一、この樣な大いなる告白をしようとする氣持の中に、既に世間の眼には、作り物としてうつる何か嘲笑すべきものがあります。…この、まるで恐怖に負けた弱さから來るやうな、混亂した不確かな文體は別にしても。…いやいや、克服し得ぬなどと、信じようとなさるな」と、彼は突然目が醒めた樣に聲を上げたが、その調子は殆ど有頂天に近かつた——「このままの書き振りだつて（と、紙片を指して）、ただ本心から他人の吐きかける唾や打擲やを受けるお心算なら、立派に克服お出來になる。…つまり、堪へ通すことがお出來ならば、これまでの例に徴しても、もし大いなる業に本心からの謙虚さがありさへすれば、汚辱の十字架が大いなる榮光や無限の力に變ずるのが世の常です。だが、大いなる業にこの謙虚さがおありですか。それとも今に出來て來るのですか。いやいや、貴方に入用なのは、そんな挑戰の態度ではない。底知れぬ謙虚と忍從の心だ。貴方は先づ、自分の審き手を蔑すむのはやめて、偉大な教會に對すると同樣、彼等を眞心から信じ切らなければいけません。その時こそ、貴方は彼等に打克つことが出來、範として立つことが出來、愛に融け入ることもお出來になる。…ただ、堪へ通すことさへお出來だつたら。」

「伺ひたいのは、この紙片の中の何處が一番可笑しいかといふ事ですが。」

「何故そんなことにかかづらはれるのでせう。その病人のやうな苛立ちは何故なのでせう」——チホンは頭を振つて傷ましさうに叫んだ。

「何故でも構ひません。可笑しい所を擧げて下さい…」

「醜惡が致命的な瑕です」と、チホンは眼を伏せながら囁いた。

「醜惡？　どんな醜惡です？」

「罪です。罪はまことに醜惡なものです。罪は如何なるものにせよ、流血や畏怖が多ければ多いだけ、謂はば愈々繪畫的に、愈々感動的になるものですね。だが、しん底から破廉恥で汚辱に滿ち、如何に畏怖によつて辯護されても、

どうにもならぬ罪もあります…」

チホンがここまで言つたとき、遮るやうに、

「と仰言るのはつまり、私があの小娘の手に接吻したり…そして、それから臆したり、それから…つまりああした事すべての中に、貴方は嘲笑すべき私の姿を見られると云ふ譯ですね。わかりました。よくわかりました。で貴方は、私にはとても耐へ通せまいとお考へになる?」

チホンは何も言はなかつた。スタヴロギンの顔はさつと蒼ざめ、歪んだ樣に見えた。

「貴方が、瑞西の例のお孃さんが此町にゐるかどうかを、お尋ねになつた譯がやつと分りましたよ」と、まるで獨り言みたいな小聲で彼は言つた。

「まだまだ心の用意がお足りにならぬ。心の鍛へ方がお足りにならぬ」と、チホンは言ひ添へた。

「聽いて下さい。實は、私は自分を赦したいのです。これこそ私の肝腎の目的なのです。いや、目的の全部なのです」と、遽かにスタヴロギンは、兩眼に暗い狂喜の色を湛へながら口走つた、「今申し上げるのが本心からの告白です。これが正銘の眞實で、あとはみんな嘘つぱちなのです。この曉にこそ、あの幻影が消えるに違ひないと思ふのです。何故私が、涯もない苦惱を自ら求めてゐるか、その理由はこれに他なりません。…私をおどかさないで下さい。われとわが毒氣で、死にさうな私を」——又しても心にもないことが不圖口を衝いた風に、こんな事を言ひ足した。この言葉はチホンにも餘程思ひ掛けぬものだつたらしく、ぎよつとして腰を浮かせた。

「もし貴方に自分を赦すことがお出來で、御自分の苦惱によつて、この赦免だけを探ね求めてをられるのなら、それはもう貴方が總てを信じて被入るといふ事になりますとも」と、彼は勝ち誇つたやうに叫んだ、「それを何故、神を信じないなどと言はれたのです。」

スタヴロギンは答へなかつた。

「その不信仰を、神はお赦しになるでせう。何故と申して、本心では聖靈を崇めてをられるのだから。ただ、それを御存知ないだけのことだから。」

「私に赦しはありますまい」と、スタヴロギンは暗鬱に言つた、「もし我を信ずる『この小き者の一人を』躓かすならそれにまさる罪はなく、またあり得もせぬと、貴方の本に出てゐますね。それ、この本に。」

彼は福音書を指して見せた。

「そのことなら、貴方によろこばしき消息をお傳へすることが出來ます」と、チホンは優しく言つた、「もし貴方が、ただ自分をさへ赦すことがお出來になるなら、キリストもまた、赦し給ふでせう。…いや、いや、これは飛んだ間違つたことを申し上げました。つまり、よしんば己れ自らと和解し、赦すことが終にお出來にならぬとしても、キリストはその貴方の志や大きな惱みに免じて、赦し給ふでせう…。何故と申せば、『その途のわれらの前に明かに開けぬうちは』、羔のありとある途や信條を殘らず盡す言葉は、人間の言葉にも思念の中にも無いのですから。誰が捕捉しえぬものを捕捉し、誰がありとある限りなきものを悟るものですか。」

彼の唇の隅は、先刻のやうに再び引攣り、見えるか見えぬかの痙攣が面をかすめた。緊張したその瞬間を、彼は堪へ切れずに急いで眼を落した。

スタヴロギンは褥椅子の上の帽子を取つた。

「またその中に伺ふことにします」——と、彼は深い疲勞の色を見せながら言つた、「何しろ大分お邪…その、結構なお話や、有難さや…貴方のお氣持など、唯々過分に存じ上げます次第で。今こそ、或る人達が貴方をあんなに敬愛申し上げてゐる譯が初めてわかりました。貴方がそれ程に愛して下さる人間のため、祈つて頂きたく存じます。…」

「もう、もうお歸りですか」と、チホンも急いで座を起つたが、こんなに早く客が別れを告げようとは思ひも掛けぬ

面持だつた。「實は、ちよつと……」と、當惑げな樣子で、「ちよつとお願ひを致すことがあつたのですが、ですが、それをどう……それに、申しにくいので……」

「ああ、それならどうぞ、どうぞ。」――スタヴロギンは帽子を手にしたまま、すぐに腰を卸した。チホンははじめはその帽子を、次には相手の姿勢を眺めやつた。この半狂人の昂奮家が、いきなり社交的な樣子に返つて、用談の締めくくりでもつける樣な具合に、「ではもう五分だけ」と居ずまひを直した態度に、彼は益々度を失つた。

「いや、お願ひと申しても、つまりその……もうお察しのことでせうが、ニコライ・フセヴォロードヴィチ（お名前と御父稱はたしかかうでしたね）、つまり、その文書を御公表になると、貴方の御運の破滅に――例へば、御經歷の上でのことにせよ、それから又……その他總てについても。」

「經歷ですつて？」――ニコライ・フセヴォロードヴィチは、不快げに眉根を寄せた。

「みすみす瑕をつけて、何になりませう。强情と申しては何ですが、それが何になりませう。」――明かにばつの惡さを自ら意識しながら、チホンは殆ど哀願せんばかりの調子で言葉を結んだ。病的な暗い表情が、ニコライ・フセヴォロードヴィチの面にありありと浮んだ。

「それなら、もうお願ひしてありますし、もう一度だけ此方からお願ひします。たとひ何を仰言つて下すつても御無駄です。……それに、他の事にせよ、お互にくどくどと說明し合ふのは、大分堪らなくなつて來ましたから。」

彼は意味ありげに、肘椅子の中で姿勢を變へて見せた。

「私の心が分つて下さらないのです。氣分を落着けて、すつかり聽いて下さい。私の考へは御存知の通り、かうです。貴方の大いなる業（わざ）は、もし謙虛さから來てゐるのなら、立派にキリスト者的の業になり得ませう。つまりこれは、貴方が耐へ通された場合ですね。また、假令耐へ通すことがお出來にならなかつたにせよ、主は貴方を原罪の犧牲とみなし給ふでせう。一つの言葉も、一つの心の動きも、不圖した思ひも、惡く無益には失はれずに勘定に加へられるでせう。ではありますが、私はかうお勸めしたいのです。この大いなる業の代りに、もつともつと大いなる業を遂げられる樣にと。これこそは疑ひもなく大いなるものだと云ふやうな。……」

ニコライ・フセヴォロードヴィチは何も言はなかつた。

「貴方は、苦行と自己犧牲との欲求に打ち敗けて被入る。この欲求に先づ打ち克つことです。そしてこの發表も、さうした企ても延期されることです。それでこそ始めて、總てを克服お出來になるでせう。で自分の傲慢と、貴方の心に憑いてゐる惡鬼を、思ふさま汚辱しておやりになることです。最後の勝利者におなりなさい。自由を手にお入れなさい。……」

彼の眼は燃えてゐた。そして哀願でもするやうに、兩の手先を胸に組み合はせた。

「貴方がこの總てを大變病的に解釋され、大した價値を置いて居られるには一驚しました。……ですが、私にも評價の分別はあると信じて頂きたいのです」――鄭寧に、しかし何處となく癇癖の色を見せながら、ニコライ・フセヴォロードヴィチは言つた、「貴方は、非常に私を係蹄に掛けたがつて居られる樣です。それは疑もなく極めて崇高な目的からで、つまり善と人類愛に基いて居られる。貴方は、私が簡單に身を固めて、ケレンもこんな紙片も棄てて、まあ結婚でもして當地のクラブの會員になり、祭日のたびには貴方の修道院の門をくぐり乍ら一生を終へる――そんなになる樣に望んで居られるのですね。ところで貴方は、シニックであり、また人の心を讀むのが商賣で被入るからにはきつと自分の思惑通りになるものと睨んで居られるのでせう。それには唯、この際禮儀上私をうまく口說き落せばいいのだと睨んで被入る。何故なら私の方でも口說き落されようと構へて、ただその禮儀の手續きを待ち設けてゐる際だからだ。……さう睨んで被入るのでせうね。同時にまた、私の母のことも忘れずにどうかして母を安心させてやりたいと目論んで居られることも確かだ。賭をしてもいい。……」

彼は歪んだ薄笑ひをした。

「いや、そんな罰ではなく、もつと他のを考へてゐるのです」と、スタヴロギンの薄笑ひや文句などには耳も藉さずに、チホンは熱した調子で續けた、「私の知つてゐる老爺で、當地ではありませんが、さして遠くない所に住んでゐる人があります。その人は隱者で、スヒイマの位〔註、最下の僧位〕をしか持つてゐませんが、とても私共にも考へ及ばぬ程のキリスト教の大智識なのです。私の賴みならよく聽いて呉れます。で、貴方の事をその人に話さうと思ふのですが、御異存はありませんか。その人の所へ弟子入りして御覽なさい。五年なり七年なり、その後の模樣で必要と思はれるだけ、その人に附いて御覽なさい。この大いなる犧牲で、貴方が現に飢ゑ渴いて居られること、また思ひ設けても居られぬこと皆を、贖つて見ようと御自分に誓はれてはどうでせう。何しろ、そこで何を受取られるかは、今とてもお分りにはなりますまいから。」

スタヴロギンは眞面目に聽き入つてゐた。その蒼白い頰が、すつかり赤らんだ程だつた。

「貴方は、私にその僧院の坊主になれと仰言るのでせうか」と、彼は訊いた。

「僧院に入られることも、剃髮なさることも要りません。內々の、表立たない弟子になられるだけです。そのまま世間で暮して居られても差支へないのです。……」

「いや、御免を蒙りませう、チホン師。」——スタヴロギンは氣難しげにさう遮つて、椅子を起つた。チホンも起ち上つた。

「どうなすつたのです?」彼は、チホンの方を怖しげに凝視めて、急に叫び聲を上げた。チホンはすぐ眼の前に、兩の掌を胸のところに組み合はせて立つてゐたが、まるで激しい畏怖からでも來るやうな氣味の惡い痙攣が、一瞬その面をかすめた樣だつた。

「どうなすつたのです? どうかされましたか?」スタヴロギンは繰返しつつ、相手を支へやうと駈け寄つた。倒れるかと思はれたのだ。

「私には見える……ありありと見える」と、チホンは胸の底に滲み透る樣な聲で言つた。激しい悲痛の色がその表情に讀まれた。「つひ今しがた程、貴方が新たな罪に、それもこれ迄とは比べ物にならぬ程烈しい罪に、間近かに立たれたことはなかつたのが。可哀さうなお人だ。」

「御安心下さい」と、彼の樣子にすつかり動顚してスタヴロギンが哀願した、「私は、多分延期します……貴方のお言葉は本當です……私はこれを公表しますまい。……御安心下さい。」

「いや、私の言ふのは、公表の後のことではない。私の言ふのは、その大いなる歩みを踏み出す一日前、または一時間前かは知らず、とにかく公表の前に、懸命の出口として貴方は又もや新たな罪に突き進むのだ。それも、今かたくなに言ひ張つてゐるこの文書の公表を、ただ逃れたいばかりに新たな罪を犯すのだ。」

スタヴロギンは忿怒にぶるぶると身顫ひした。いやそれは、殆ど畏怖からだつたとも言へる。

「呪はれた心理屋だ」——激怒の極、彼は相手の言葉を遮つて、後も見ずに僧房を出て行つた。

スタヴロギンの告白

昭和九年五月二十日印刷
昭和九年五月二十五日發行

定價金六拾錢

譯者　神西清

發行者　東京市京橋區木挽町二ノ四竹田ビル　松村保

印刷　理想社
製本　國本製本所

發行所　東京市京橋區木挽町竹田ビル　作品社
振替東京七四二八七
電話京橋(56)二一四七四・六九四

井伏鱒二著
河上徹太郎序
佐野繁次郎裝

田園記

新菊判函入
定價一圓八十錢

★井伏氏の隨筆は時に小說より面白いと云はれるほどだがそれは氏の隨筆が小說以上に構成的でしかも氏の人間味と獨自な才能が實に率直にさらけ出されてゐるからに他ならない

アラン
桑原武夫譯

散文論

四六判函入
定價一圓

★アランの藝術論は飽迄も現實の作品から出發し創作の眞諦に觸れ作家を指導する實踐的性格を持つ故に現佛の新作家にして彼の影響を蒙らない者は皆無と云つても過言ではない

ブルウスト
井上究一郎
久米文夫譯

スワンの戀

總革版二圓五十錢
普及版一圓五十錢

★二十世紀の文豪ブルウストの此の大長篇は文學的にはその清新な愛慾描寫により世界の文壇に波紋を起し哲學的にはその深刻な心理分析により今日必須の研究對象となつてゐる

近刊

深田久彌著 **津輕の野づら**

ブルウスト
井上究一郎
久米文夫譯
名（「失ひし時を索めて」第一卷「スワン家の方」第三部）

豐島與志雄著 **エッセイ集**

三好達治譯 **ジャム詩集**

東京・京橋木挽町・竹田ビル
作品社
振替口座東京七四二八七番

653
295